

咲夜さんの おしっこ穴 合同

しっこの穴が見たい!!!

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

はい咲夜さん
しゅしゅ...

灰になっちゃえ
ばいばいのよ...!

吸血鬼が聖水飲んで
大丈夫なんですか？

わく咲夜のおしゅしゅ

ふふ愚問ね...
これはただの
ダーシリンティーや

ゾボゾボゾボ









霧雨霊夢

ツイッター

@reimaridream



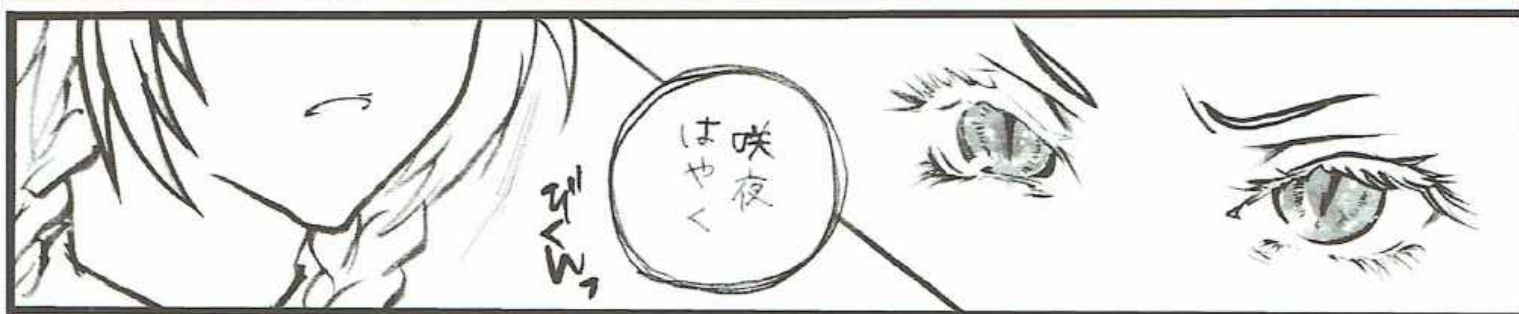


パチユリ様
なんてコトを



も〜
ちよっと確認する
だけなんだから
早く見せなさい

ちよっ!!
お待ち下さいませ
お嬢様!!
いくらなんでも
強引過ぎます!!



咲夜
はやく



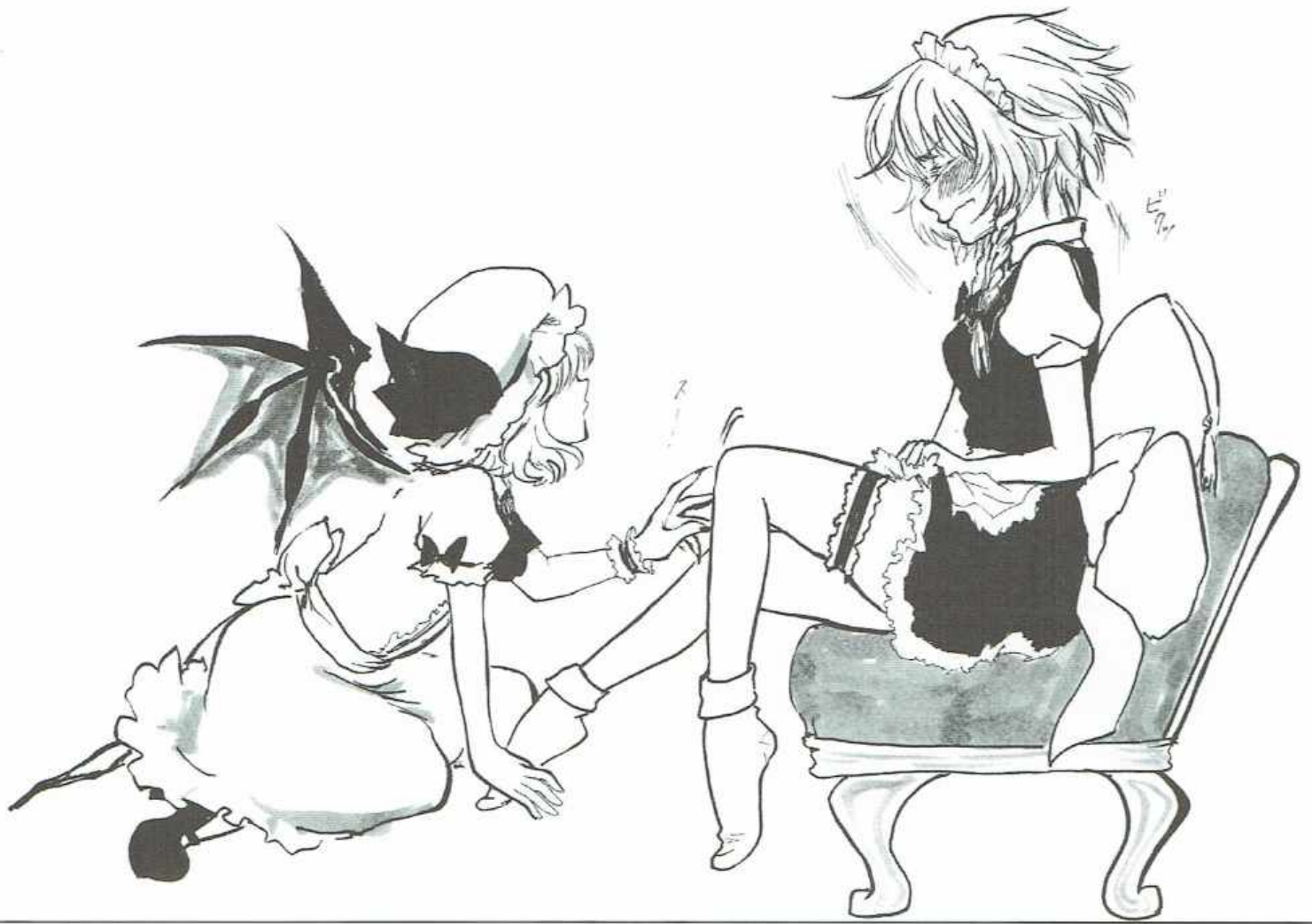
この瞳は
悪魔がスルい...

じゃあ、あちで
ぬいで座って、



お嬢様の
あの瞳...

は...



あら？ 咲夜
貴女少し
汗をかいてる？

少し毛が…
少ないのね。

ヒダッとした
内側に穴が

艶っと湿っていて新鮮な
赤みのある
アプリコットジャムみたい

~~~~~

頭の裏と腰が  
ムズとする  
不思議な香りがするわ。

あら？

何だか湿り気が  
強くなつた気が…

ヒダのあたりが  
ヒクヒク動いてる  
触ってみようか知ら？

!!



確かに  
穴は3つね

一つはアレて

あと2つは

どっちも

おしっこが  
出てくるの？

それとも  
片方がすここ。

ちよっと  
咲夜

してみな  
さいよ！

??

!!

そ、そんな!!

お嬢様に粗相を  
お見せする訳には!!

私がどうしても  
見たかって  
言ってるの!!

早く!

は……い……

もしここで断ったとしてもお嬢様の  
ご気嫌を損ねてしまうかも知れない……  
それにあの瞳で見つめられれば同じ事……

かしこまりました。  
お嬢様……

ああの…  
お嬢様……

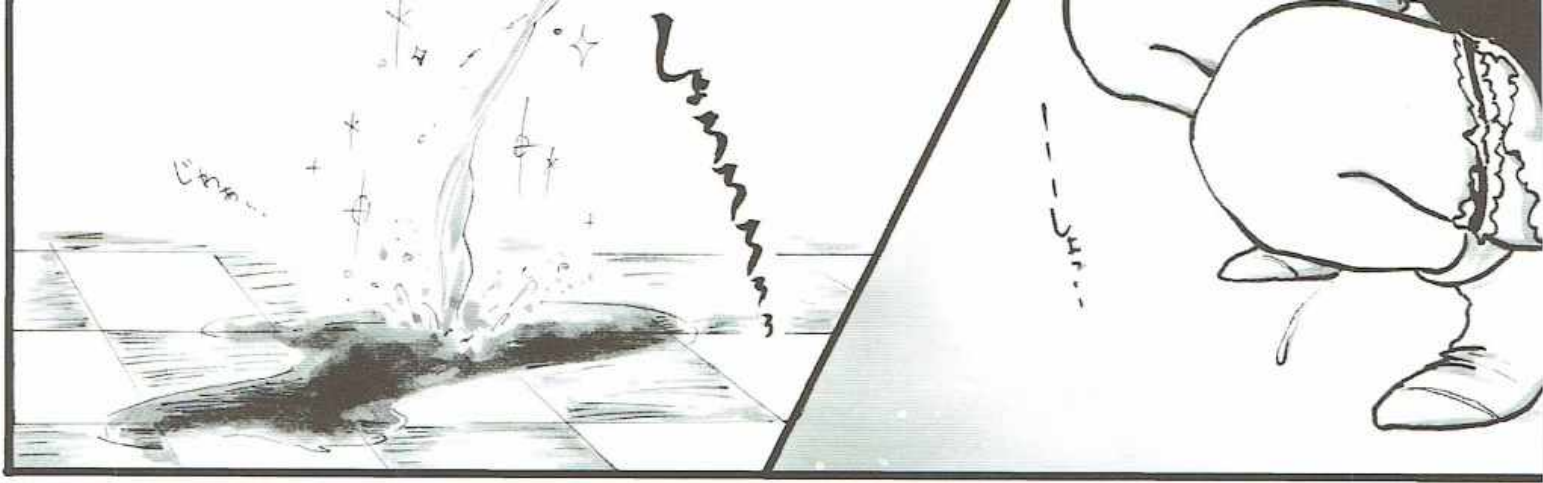
なまに？、咲夜

その…  
恥ずかしすぎて  
…出ない…です

ん〜  
どうねえ…  
時を止められたら  
私が見られ  
ないし…

ホラ、  
こうすれば  
見えないから  
恥ずかしく  
ないわよね？！





あ、

ふるふる、

は、

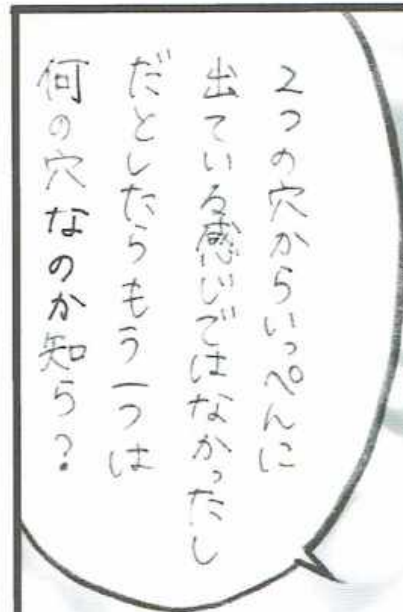




あゝ  
でも結局目を  
塞いでいたから  
どっちの穴から  
出ていたのか  
見れなかったわ



え？それは  
赤ちゃんーのー！



二つの穴からいっしょに  
出ている感じではなかったし  
だとしたらもう一つは  
何の穴なのか知らう？

む〜w.




あら咲夜、  
知らないの？

赤ちゃんは  
キアツツいなくなくて  
本当はレタスから  
生まれてくるのよ！



Fin

Thank you 

2016.7.23 wha

咲夜さん、この後のおまじり頑張り、スネ

# 紅魔館

おしっこすると  
痛い？

は、はい

尿結石じゃ  
ないのそれ…

いいえ、  
もつと先の方の

こう、  
尿道から出る瞬間  
痛くなるんです

ふむ…まあ  
見てみると  
わかんないね…

その指  
やめなさい

脱いで

…はい…

ん…尿道に魔力を  
感じるわ…

えっ…の、呪い  
とかですか…？

いや…そういうの  
じゃないね…

スル  
スル  
スル

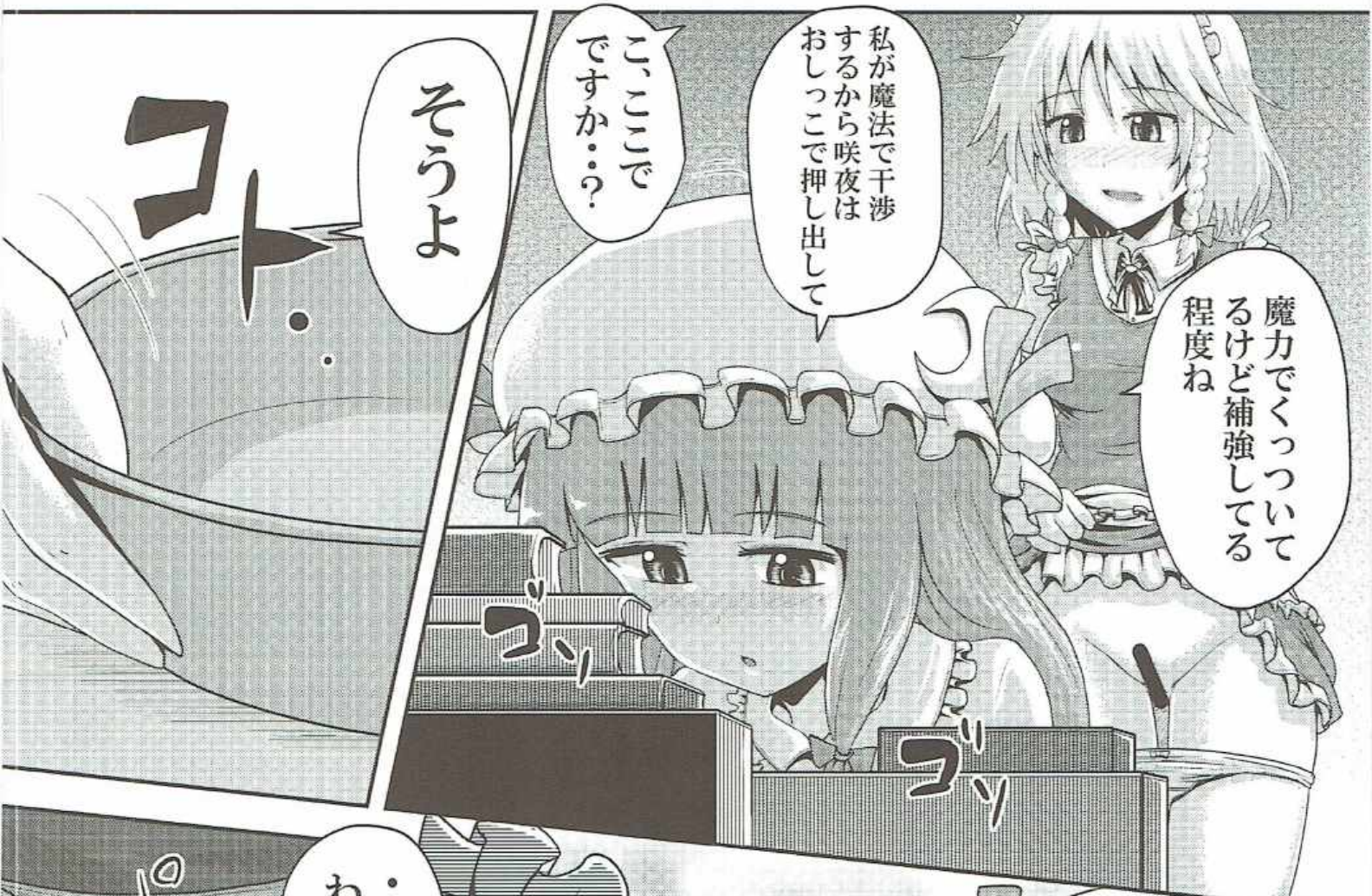


んー…？  
何だコレ…

何か尿道に  
付着してるわ…  
これが原因ね…

と、取れますか…？

取れるかな…



魔力でくつついて  
るけど補強してる  
程度ね

私が魔法で干渉  
するから咲夜は  
おしつこで押し出して

こころで  
ですか…？

そうよ

コト



さあ

あ、あの…今  
出ないのですが…

…仕方ない  
わね…

え…っ





妖怪…!?

えっ!

ボウ

わわっ…!



お嬢様!?

ちよつと何よ、  
せっかく  
気持ちよく  
寝てたのに…

何で咲夜のまんこで  
寝てたのよ

何だよままえ

ふっ、よくぞ  
聞いてくれた



咲夜のおしっこが  
あまりに芳醇でね…

クリスマス

いっそ尿道に  
住めばいいや、と

何言ってるんだ  
こいつ



さあ、咲夜  
戻るわよ!

お嬢様ああ  
ああああああ

ひびくおしっこ

まんこ出し  
おしっこ

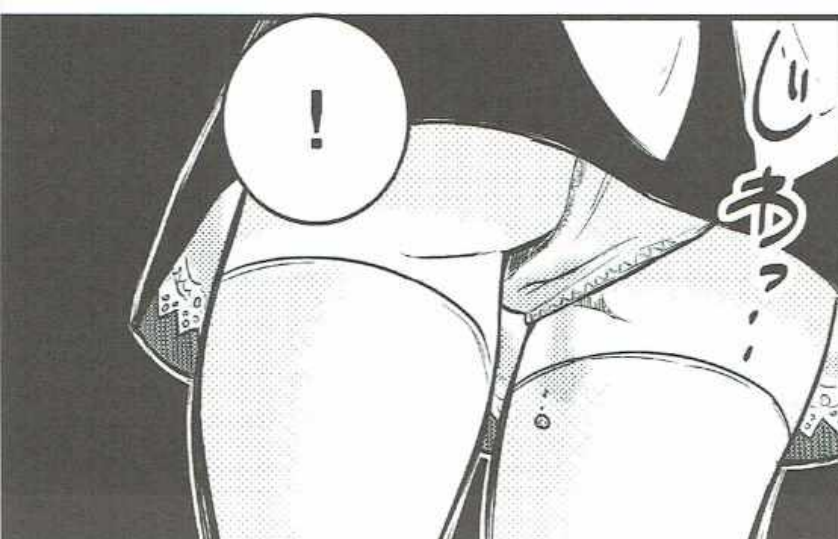
# コミケ最大手サークル

# 東2

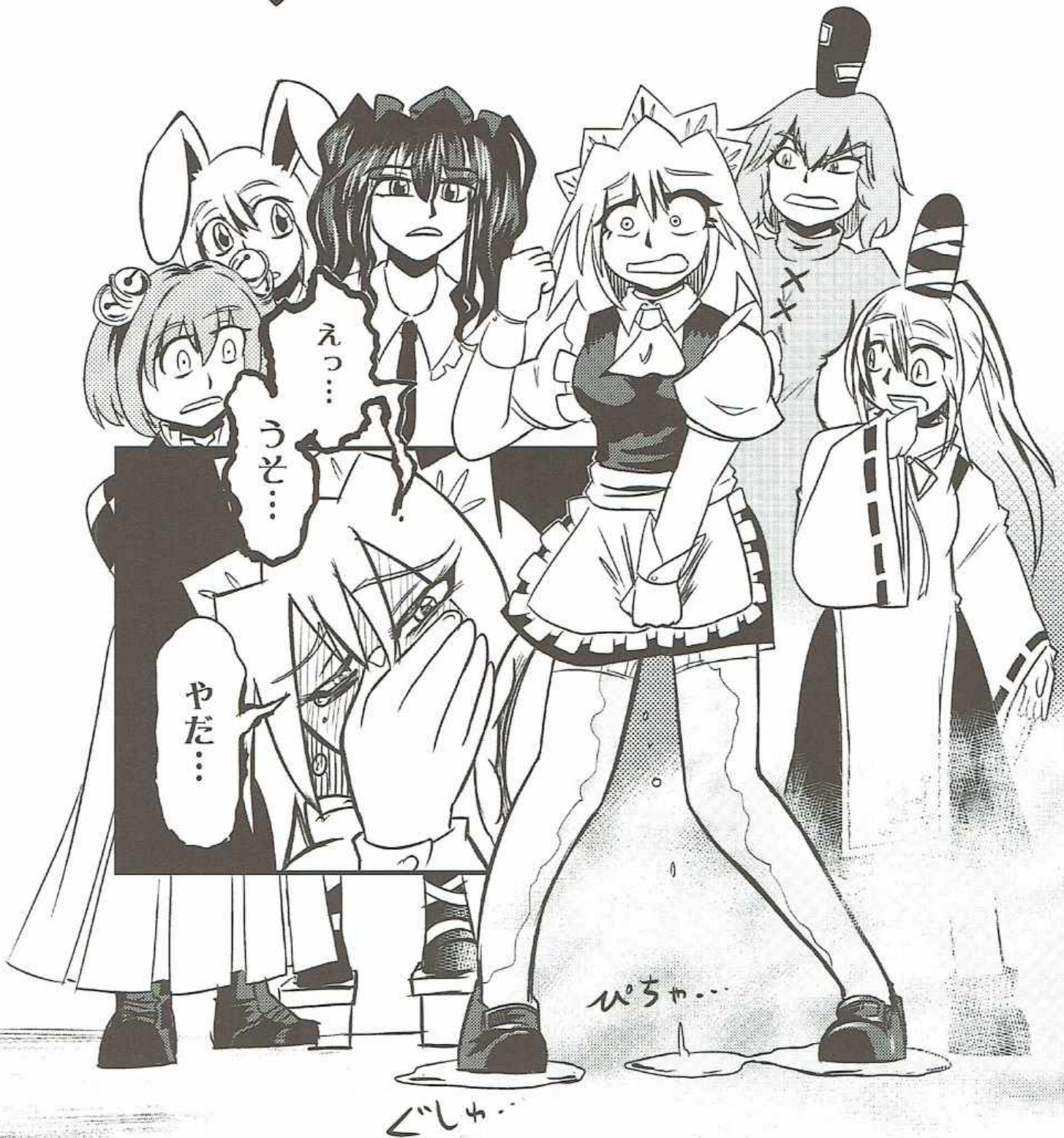
女子トイレ最後編



# 女子トイレ



あっ.....



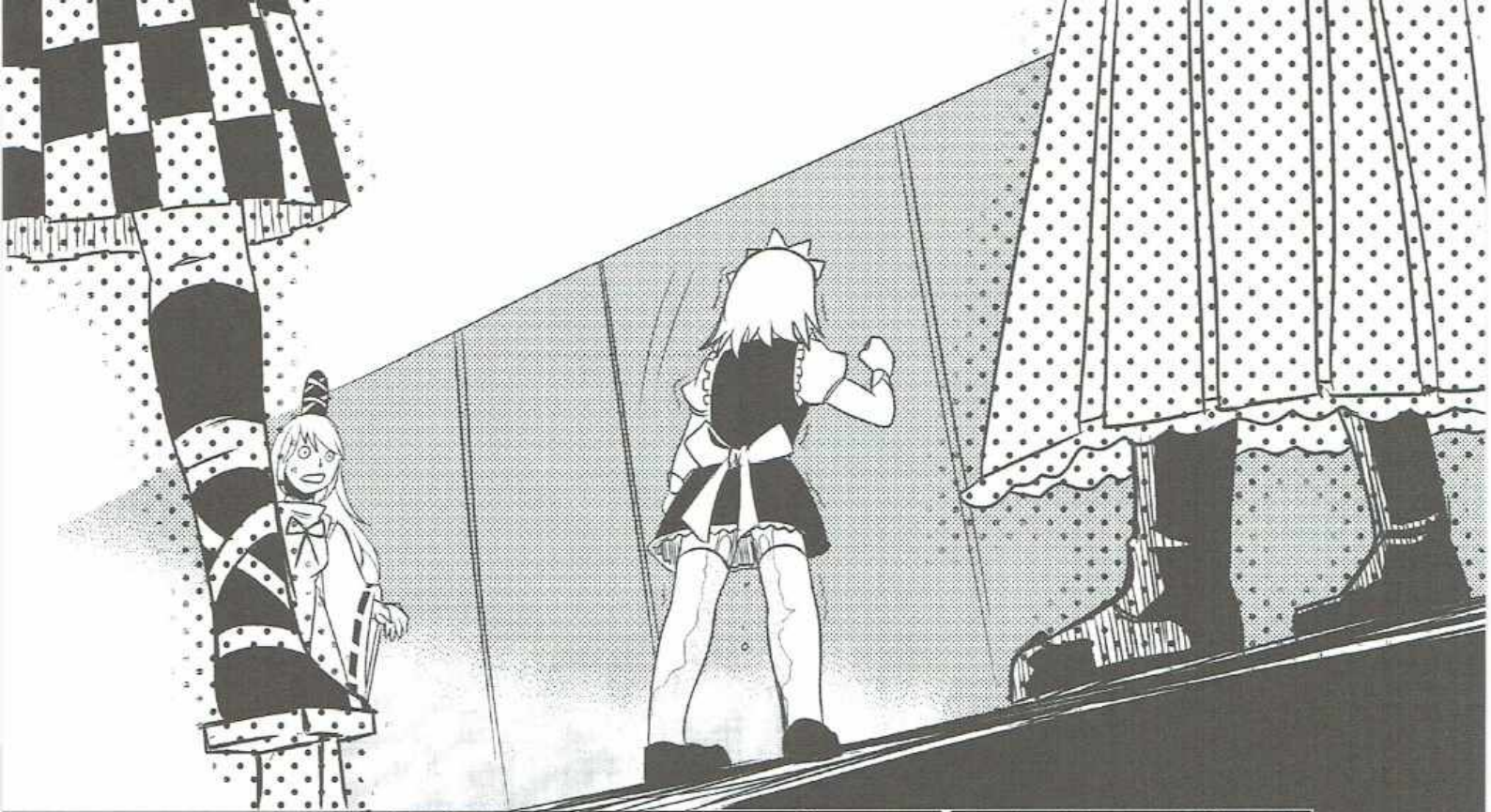
やだ...

うそ...

えっ...

わっか...

しゅ...







そんな目で  
私を観ないで!!

ぽろ  
ぽろ

そ...



えええん



気に入りませんでしたか？  
殺したての紅茶  
いれたての紅茶

……

じ

特別な紅茶  
片栗野干



何言ってるんだ  
コイツ

は

い？



いいえ  
味の選んでくれた紅茶が  
不味いわげじゃない

とりあえず  
おしっこしてくれるかしら？





2 血液を入れ熟成させる

Let's  
Cooking!

1 咲夜の膀胱を綺麗にする

ドパーと

仕方のない子ね  
説明してあげるわ

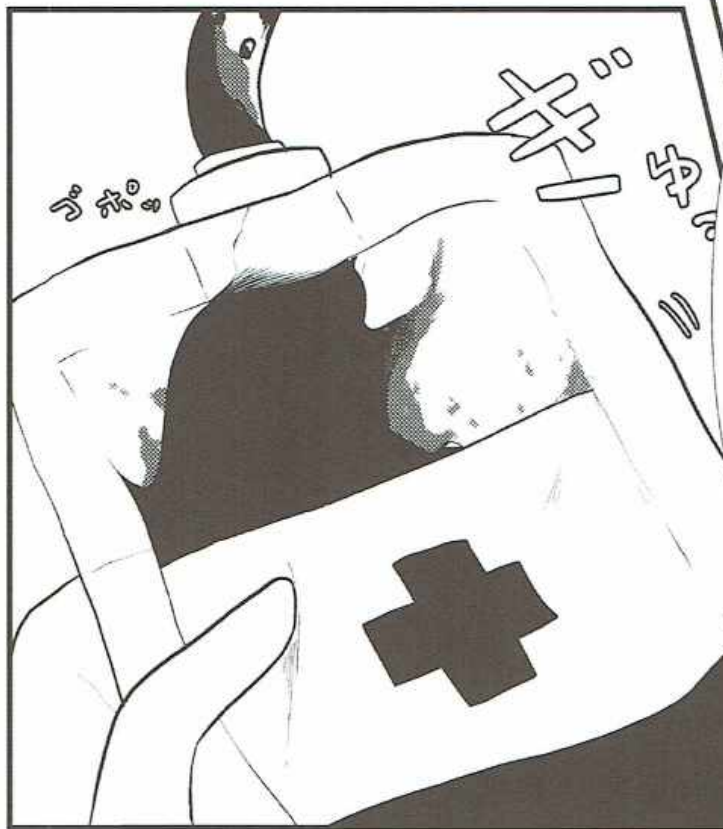
つまり  
こういうこと



いいわねその表情  
流石だわ咲夜

さあお前達  
咲夜の尿道へ  
ちやんと刺すのよ

は？



えらいわ咲夜  
ちゃんと自分で広げられたわね



私の話聞いてますか

これであとは  
一週間熟成させれば……  
ああ、今すぐにでも飲んでしまいたいわ



お嬢様……どうしても……  
その……ダメですか……



## おしっこの穴コラム① ～尿道について～

尿道(にょうどう、英: Urethra)は、哺乳類の泌尿器に分類される器官のひとつで、尿が、膀胱から体外へ排泄されるときに通る管のこと。

男性の場合、膀胱の出口で、精管が接続されており、射精時には、精子を含む精液を運ぶ管でもあるので、生殖器でもある。

ヒトの場合、骨盤内にある膀胱から、恥骨結合の下を通過して、外陰部へと続く。

女性では、膣前庭に開口するが、男性では、膀胱を出ると、前立腺の中心を貫通し、その後、陰茎内部の尿道海綿体を貫通した後、陰茎亀頭先端に開口する。

そのため、男性と女性とで、尿道の形状が大きく異なる。

男性の場合、成人で16から20cmの長さがあり、細い。

一方、女性の尿道は太く、長さは3 - 4 cmと、男性よりもかなり短い。

これが、女性のほうが尿路感染症を起こしやすい原因であるといわれる。

尿道には、膀胱を出たあと、尿道周囲の筋肉が発達して、内部の尿の通行を妨げる尿道括約筋がある。

この筋は随意筋で、意識的に尿を我慢するときに用いられる。

尿道の壁の構造は、内側に、粘膜があり、その外に主に2層の平滑筋が存在するのが基本であるが、男性の尿道海綿体内では平滑筋層は明確ではない。

尿道内部の壁の潤滑剤としての粘液を分泌する尿道腺と呼ばれる小型の分泌腺が多数存在し、尿道の内壁を湿らせている。

内側の粘膜は、女性では、膀胱のごく近くでは、膀胱と同じ移行上皮であるが、それ以外のほとんどは重層扁平上皮である。

一方、男性尿道では、膀胱の近くでは移行上皮、その後、前立腺内を通るときは前立腺の上皮と同様の多列円柱上皮となり、陰茎内では、独特の重層円柱上皮、亀頭部で重層扁平上皮と、様々に形を変える。

ウィキペディアより抜粋



何は  
お嬢様  
でしよう？



サーカーカー  
①

手伝って  
くれない？



工作

脱

ひるあお  
あおあお



ポクポクポクポクポクポク

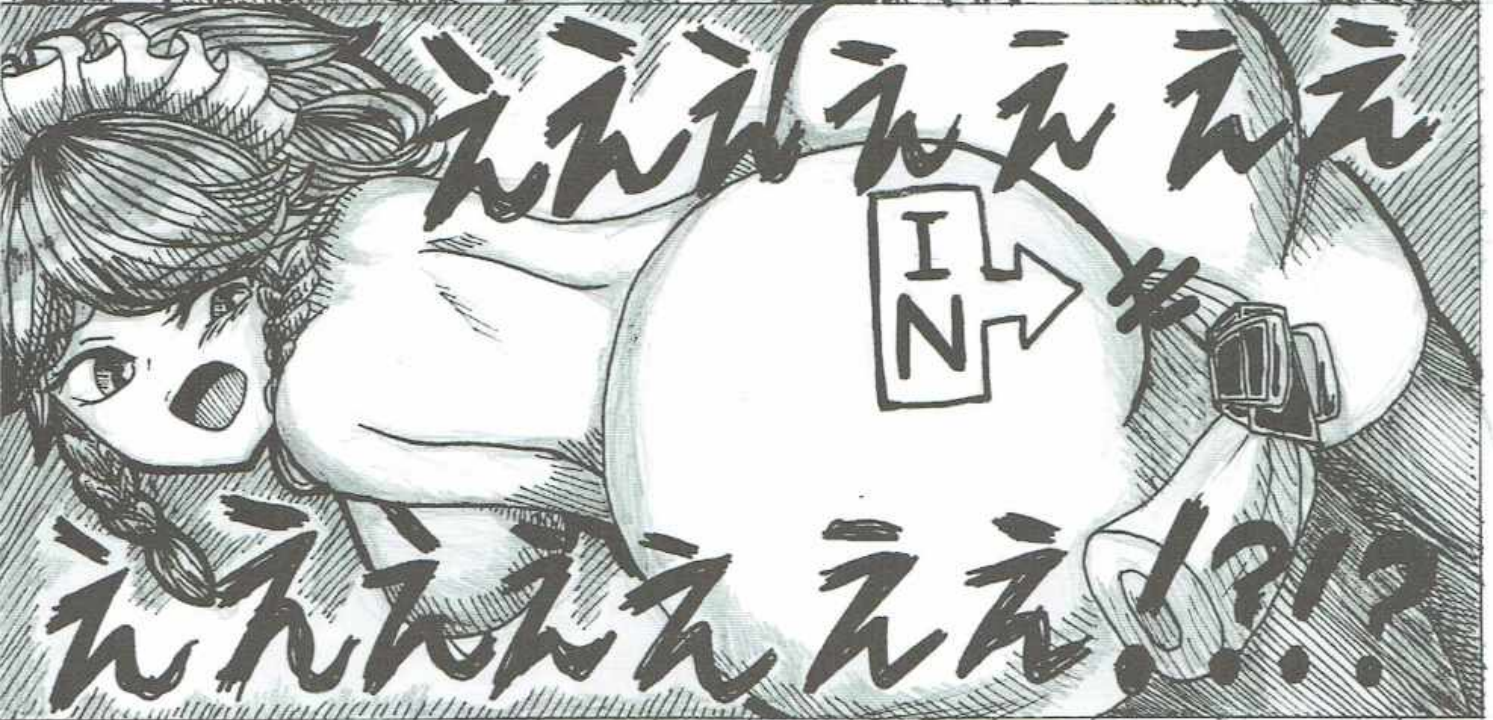


工作  
よ

ズモズモ



工作ですか？



んんんんんん  
んんんんんん！?!?!?



おおおお嬢様  
何故いきなりこんな事...  
恥づかしいです...

エエエエエエ...

000

000000

イン中 ←



いいえ味夜

この世には需要と供給があるの  
どんなささいなものにもね

主人がお客様のニーズに  
応じます。当然。もちろん

この本を手にとり  
味夜の面白さを見

すおまかせさせていただきます

ニヒヒ

カガ入らなくて  
どくん  
どくん  
どくん  
我慢できない!!!







ちやん  
た

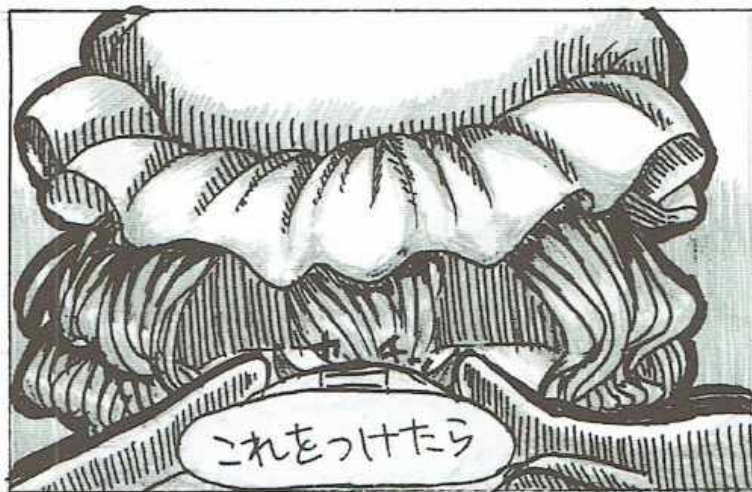
出  
つ



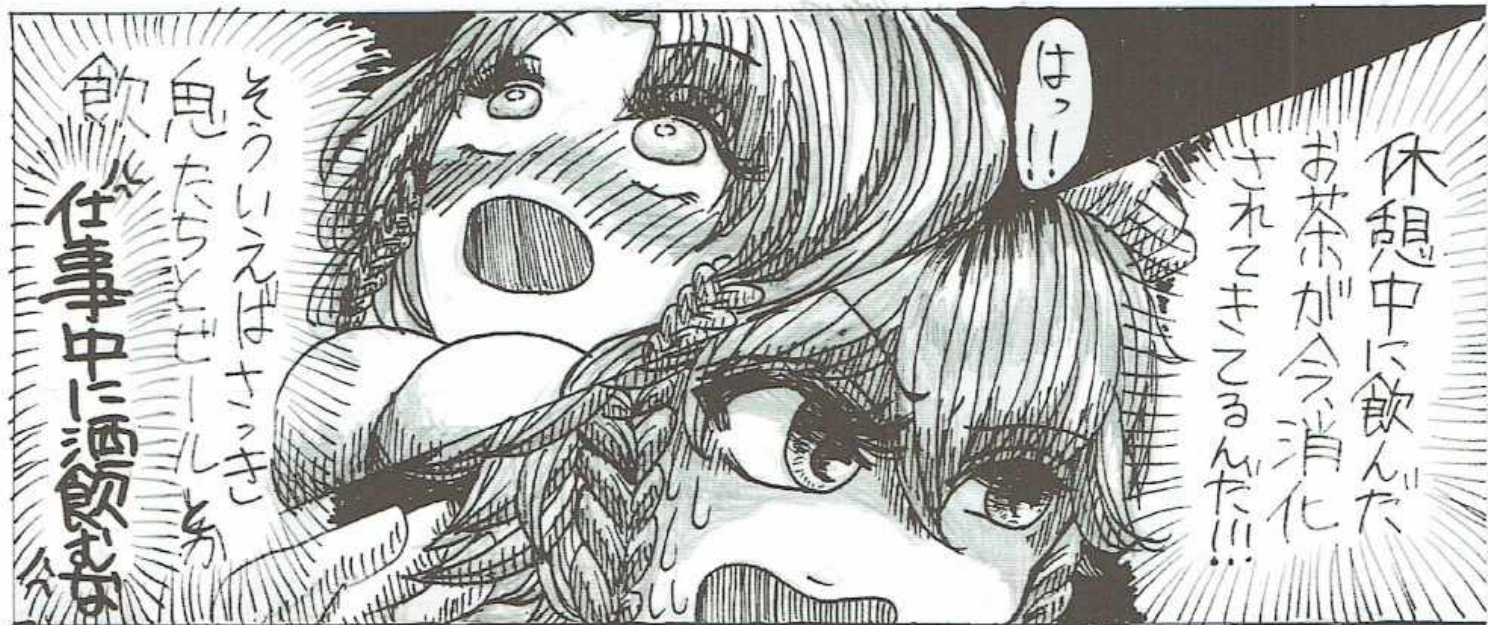
あ、  
いーんこ思いついた

フフ…  
掃除だの何だの  
言ってた割には  
豪快ねえ…









休憩中に飲んだ  
お茶が今消化  
されてきているんだ!!!

はっ!!

そういえばナンキ

息たちとゼール

飲事中に酒飲ま



もれるもれるもれるもれる  
もれるもれるもれるもれる  
もれるもれるもれるもれる  
もれるもれるもれるもれる

そろそろスニッシュから...

やばいやばいやばい  
やばいやばいやばい  
やばいやばいやばい  
やばいやばいやばい  
やばいやばいやばい

11  
17

ゾウ...

じわ...

じゅ...

ま...

しゅん  
ぱん

おん  
ん



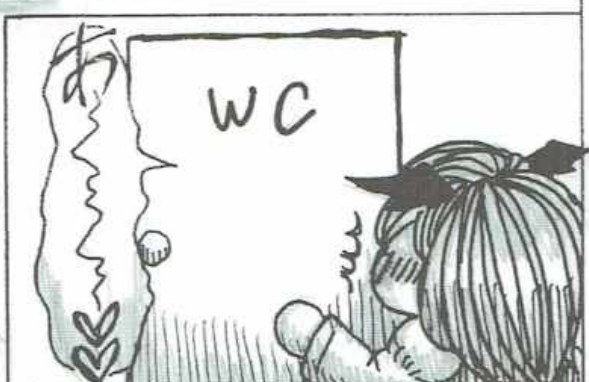
110 #11

またや

は

〇〇 (またや)

は



その後排便の度、絶頂でまるカラダに  
なりましたとさっ めてたひでたし





今回「味夜さんおしこの宛」  
の合同本に参加させて頂きました和沙様です  
わざわざお誘いいただき誠にありがとうございます!!!  
参加させて頂いてとても  
楽しかったです!!  
おかげさまでいい週末!

紅魔館のメイド  
は今日も、休む  
暇も無く大忙し

おしっこ  
したい

もし！！  
もし

///

人間界の愛してる者同士  
がある遊びがあるらしい  
の。楽しそうじゃない？  
咲夜とやってみたいの。

お嬢様、少  
しお待ちく  
ださいませ  
んか？

漏れそう

やだ！いやだ！  
少しだけ遊んで  
よー！

はあ...  
少しだ  
けです  
よ？





お嬢様何し  
てるんです  
か!?

嫌がるって事  
は、咲夜私の  
事嫌い?

そういう事  
じゃないで  
す!!

では...

やばい！限界！

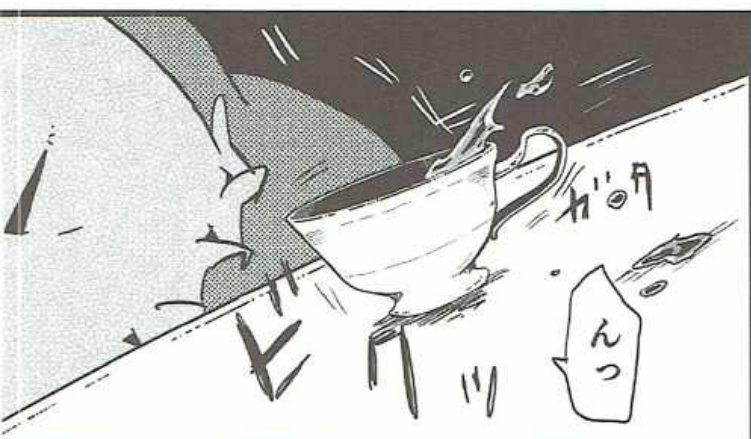
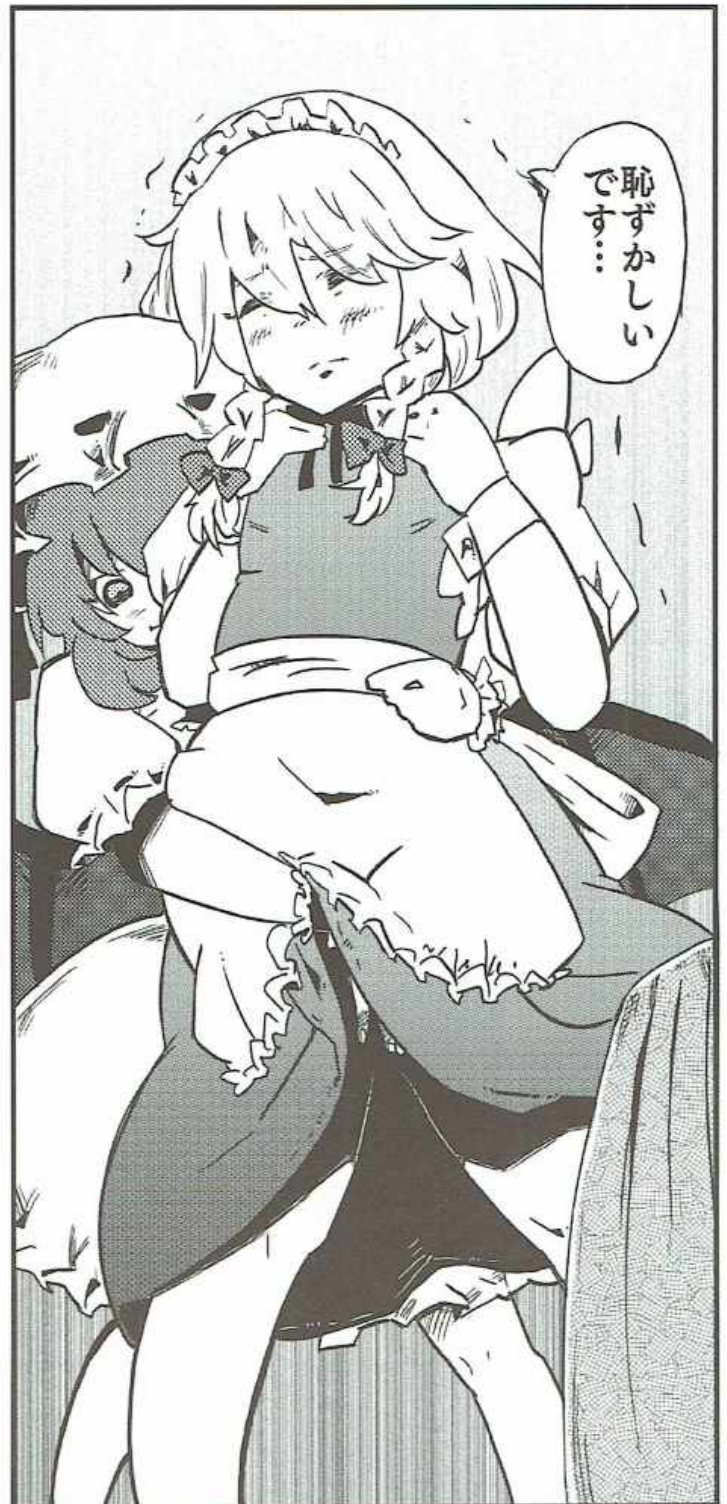
はぁはぁ...

もう漏れちゃう！

※パッド入り

この後紅魔館のネタになりました...







ご愛読ありがとうございました。MAKOcCHI先生の次回作にご期待下さい！



はじめましてMAKOcCHIと申します。

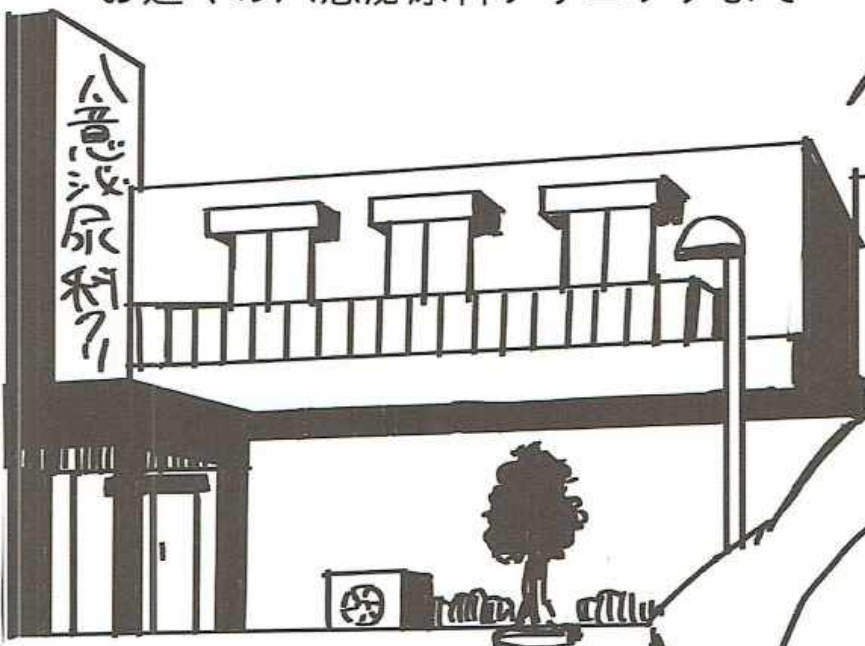
合同誌に参加するのは今回が初めてで前からやってみたいとは思っていたのですが今回うらんふ様主催のおしっこの穴合同誌の募集記事を見てこれだ!と思い参加させてもらいました。

実は言うとも尿が出にくくて頻尿の気があり、病院に行こうとは思っているのですが行こうと思うとなんか症状が収まってしまっていて完全に行く機会を逃しています。正直この文章を書いている今も我慢して早くトイレに行きたいです。こんな思いをする方が一人でも減ってほしい、そんな思いでこの漫画を描き上げました。

嘘です。本当はエロ漫画を描こうと思っていたのですが時間がないのでギャグ路線に変更しました。

皆さんは少しでもおかしいなと思ったらすぐに病院に向かいましょう。女性の方は尿道までの距離が短い為外部から菌が侵入しやすく膀胱炎になる確率が高いので特に注意しましょう。早期発見があなたの命を救うのです。

一人で悩まずにお気軽にお越しください  
お近くの八意泌尿科クリニックまで



# 拍東従者

作：みや社会主義共和国連邦

え……  
ちよつと……

何なの……  
これ……

十六夜 咲夜  
紅魔館の主レミリアの従者

気がついたようね

お嬢様……これは？

聞いて咲夜 私は一つ  
決めたことがあるのよ  
それは……

レミリア・スカーレット  
紅魔館の主。一応吸血鬼



という訳で咲夜の下のダムにこれを  
当ててダムの決壊を促そうと思うわ



今宵は咲夜の超神水おしゅゐを  
アフタヌーンティーにしよとね

……転職しようかしら……



おしゅゐ出る出る  
しーぱっぱあー☆

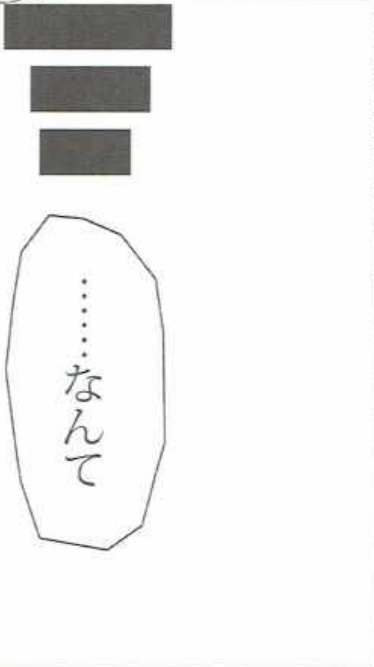


そんなの嫌あゝ  
美鈴助けてえゝゝ

フフ……助けを呼んでも  
誰もこないわよ……

放尿

潇洒超神水



この人身内をネタに  
同人誌作ってる.....

同人誌をこっそり  
作ってたのよねえ

小悪魔  
パチュリーの従者

パチュリー・ノーレッジ  
紅魔館の大図書館の主。

今度はどういった内容で  
咲夜を辱めようかしら？

良し悪しある...

ありませんよ！

一度咲夜さんに怒らちゃ  
えばいいのに.....

図書館入口

やっべえやらかした

ばれてえら

FIN

この度は本合同誌に参加させていただく機会を  
いただけまして本当に嬉しいです。  
ありがとうございます。  
初めての合同誌の参加となりますが  
刺激の多い経験となりました。  
最後に主催のうらんふさん、合同誌  
に参加された方々。本合同誌を  
手にとって下さった方々、本当に  
ありがとうございました！！

2016.10.13

サークル名



みや社会主義共和国連邦



P i x i v Niconicomunity Twitter





シミリアスカーレット  
彼女の1日は咲夜が淹れた  
この一杯から始まる…

咲夜…  
やっぱり貴女の淹れた  
紅茶は最高ね…

描いた人 賢菓子屋  
咲夜のメイドリル

勿体無いお言葉…  
あしからずございませう  
お嬢様…

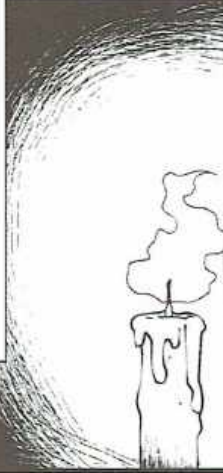
この紅茶、  
貴女が淹れたに似ている味…  
美味に淹れたに似ての味…  
そして甘くも甘くない…  
飲めたもたじやなかったわ



そう！この紅茶！  
実は咲夜の血尿である事はあまり知られていない…  
そして美鈴が淹れた紅茶こそ本物の紅茶なのである。  
※もちろんシミリアは咲夜の血尿を本物の紅茶だと勘づいている。

ふう…おついでに飲たいわ  
ごも調製な紅茶で…  
あまり響か取れないのでございませう  
残念な…

おしりおしり味わて…お嬢様…  
おの9…  
おの9…  
おの9…  
おの9…



そう！この十六夜咲夜！！  
血尿を出す為だけに！  
日々過酷なトレーニングに次ぐ  
トレーニングをしている…  
彼女が人間なのにも関わらず、  
恐ろしいまでの身体能力は、  
まさにここがルーツである。



それに加えて今回の膀胱拡張…  
彼女こそがまさに瀧酒！  
平無とした態度で恐ろしい事を  
やってのけている…  
まさに瀧酒！

まさに瀧酒！！





咲夜ーっ！  
私にオシッコしてる  
ところを見せなさい

紅魔館頭首  
レミリア  
スカーレット

レミリア突然の要求っ！  
しかしそれは至極当然と  
言わざるを得ない要求  
なのであったーっ！

事のおこりは  
三十分前……

咲夜さんのおしっここの穴合同  
**レミリア  
必殺の杞憂**  
塚竹さささ

レミリアはトイレで自分の  
オシッコが出ている所が  
見えない事に気づいた

鏡で見て  
みようかしら

はじめは小さな疑問だったが  
疑問は順当に謎へと成長  
そして謎は恐怖を生むっ！

吸血鬼は鏡に  
うつらないっ！

どっつなってるの  
私のオシッコの穴

やがてレミリアの心は  
恐怖に支配される事になる

向かい合った恐怖が消滅する  
瞬間はたったの二つしかない  
一つは恐怖の根源である謎を  
解明して克服をすること

さもなくば  
死による感情の  
消滅である

レミリアが恐怖に屈して  
死んでしまふとすれば  
主を守るのは従者の宿命っ！

つまりもう咲夜は  
オシッコをしているのを  
見せる意外ないのだっ！





フフフ  
私を誰だと思っている  
レミリア・スカーレット  
に一言は無いっ！  
謎の解明の為にそれくら  
いのリスクは承知の上よ



おじょうさまここが  
私のオシッコの穴で  
ごまかしますわ

このまま放尿すれば  
私の汚いオシッコが  
おじょうさまにかかって  
しまいますわ

なるほどこうなって  
いたのね  
それじゃあオシッコを  
試してみよう

この時の咲夜には二つの  
感情が入り混じっていた  
一つは自分の大切なトコを  
観察されている羞恥心の類



背徳感である



もう一つは

そ  
それでは  
まいりますわ

自分が尊敬し忠誠を誓い  
生涯尽くすと決めた君主  
である無知クソビッチな  
ロリ洋女の顔面に  
自分の穢れたションベンを  
プチまけるという



あついでに  
紅魔館爆発



かくしてレミリアは  
恐怖から解放されたのである  
死による感情の  
消滅によって

つまりこれがレミリアが  
この世で見た最後の光景と  
なった



これがオシッコの  
出てくる瞬間なのねっ

ありがとう咲夜  
私の謎は解けたわっ！

しかし咲夜本人は汚いと  
言ったが咲夜のオシッコは  
どう考えても聖水である  
吸血鬼は聖水で死ぬ。



死ぬまでには  
咲夜さんのおしっこは  
飲んでみたい件  
by.くろく

おまたせ  
今日は私のおしっこが飲みたいなんて  
お嬢様みたいに、本当に物好きね…

どう？  
ちゃんと見える？

すぐにおしっこ出すからね  
ちゃんと見てください

私のヒダもクリトリスも  
尿道もしっかりと

ふり

どうぞ…

朝いちばんのおしっこです  
ちゃんと味わって飲んでね…

はあ

はあ

咲夜さんのおしっこは1週間前から準備してて  
果物や薬膳だけを食べてこの味を出してる  
高級なワインみたいにフルーティな味がして  
深みが強くサラッと飲み口がいい…  
アンモニア臭がなく、エッチな香りがする…

次は咲夜さんのうんちや吐瀉物を  
是非とも食べてみたいな  
キレイな咲夜さんなんなんでも美味しいはずだ

ちゅっ

## おしっこの穴コラム② ～尿路結石について～

腎臓、尿管、膀胱、尿道にできやすく中年男性に多い。

腎臓結石と尿管結石を「上部尿路結石」、膀胱結石と前立腺結石を「下部尿路結石」といい、日本人の場合上部尿路結石が大半を占める。

男女比では2.4対1で男性に多く、日本人の生涯罹患率は15%程度である。

男性の好発期は40歳代、女性は閉経後に多く発症し50-70歳代が多くなる。

しばしば激痛の発作を伴い、結石の痙痛は「痛みの王様(king of pain)」といわれるくらいに激烈であることが多い。

腰周辺やわき腹、背中側あたりに感じられ、倒れこんだり、まれに失神する患者がいるほどの痛みである。しかし尿管結石の約3割は痛みを伴わない。

結石は多くの人でしばしばできているものではあるが、できた結石の大きさが尿管よりも小さい場合は自然に尿管内を移動して排尿とともに排出され、痛みも発生せず、本人は何ら問題を感じていない。

しかし、結石の大きさが尿管と同等もしくはそれより大きい場合、尿管を塞いでしまい、腎臓で尿が作られるにつれ腎臓から結石の位置までの圧力が高まってゆき激痛が発生する。この状態でCT撮影を行うと、ほとんどの場合、腎臓の肥大が起きている。

日本で全国規模の調査が行われたことがあり、その結果が1995年に発表されたが、それによると日本人の男性約11人に1人、女性26人に1人が一生に一度は尿路結石に悩まされる、とされた。男性の発症率は女性の発症率の2倍といわれている。

「好発年齢」つまり発症しやすい年齢は30代だとされており、おおまかに言えば青年期から壮年期にかけての人に発症する率が高く、子供では稀である。

尿路結石の要因のひとつが食習慣の欧米化だとされており、生活習慣病に分類される。尿路結石が起きる人は、やがて動脈硬化などの生活習慣病にもかかってゆく傾向がある。また、糖尿病患者の約20%には、尿路結石の合併が見られるとする研究がある。

ウィキペディアより抜粋



紅魔館の魔女  
パチユリー・ノーリッジ

彼女が  
親友の為に  
した行動が

想い、想って  
した行動が

彼女の  
親友に

言わずと知れた

悪魔の館の主人  
レミア・スカーレットの  
親友である

最悪の結果を  
もたらす事になった

レミイが  
「咲夜と一つに  
つながりたい」って  
言っていたから

協力してあげようと  
思ったんだけど…

おにんま

ごめんね

失敗  
しちゃった☆



パチエのバカ  
バカバカーッ

バカッ

こんな  
子供おちんちんじゃ

咲夜に  
嫌われちゃう  
じゃないッ

咲夜なら

別に気に  
しないんじゃない？

## パチュリーの予想は 正しかったッ

お嬢様に満足して  
頂く為に：

あのサイズにぴったりな  
穴を準備しなくては…

私の、**尿道を拡張**するしか  
ありませんわね

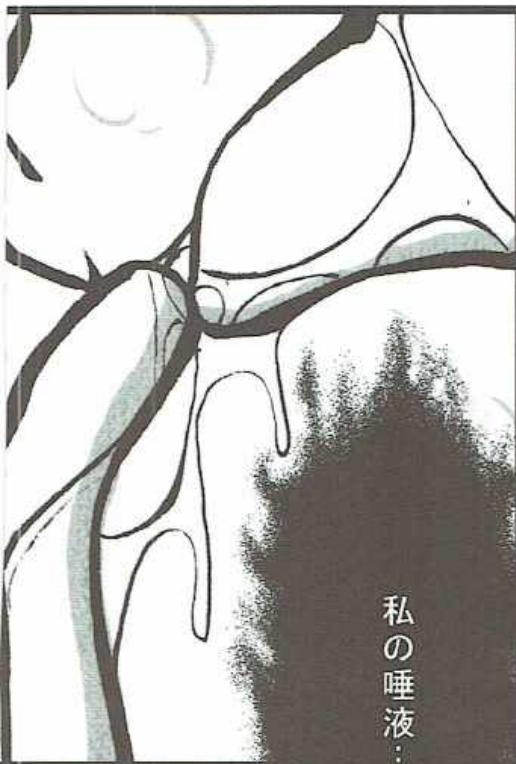
咲夜さんは**本気**だったッ



お嬢様を  
受け入れる為に…

私の尿道…

広げなくっちゃ…



私の唾液…

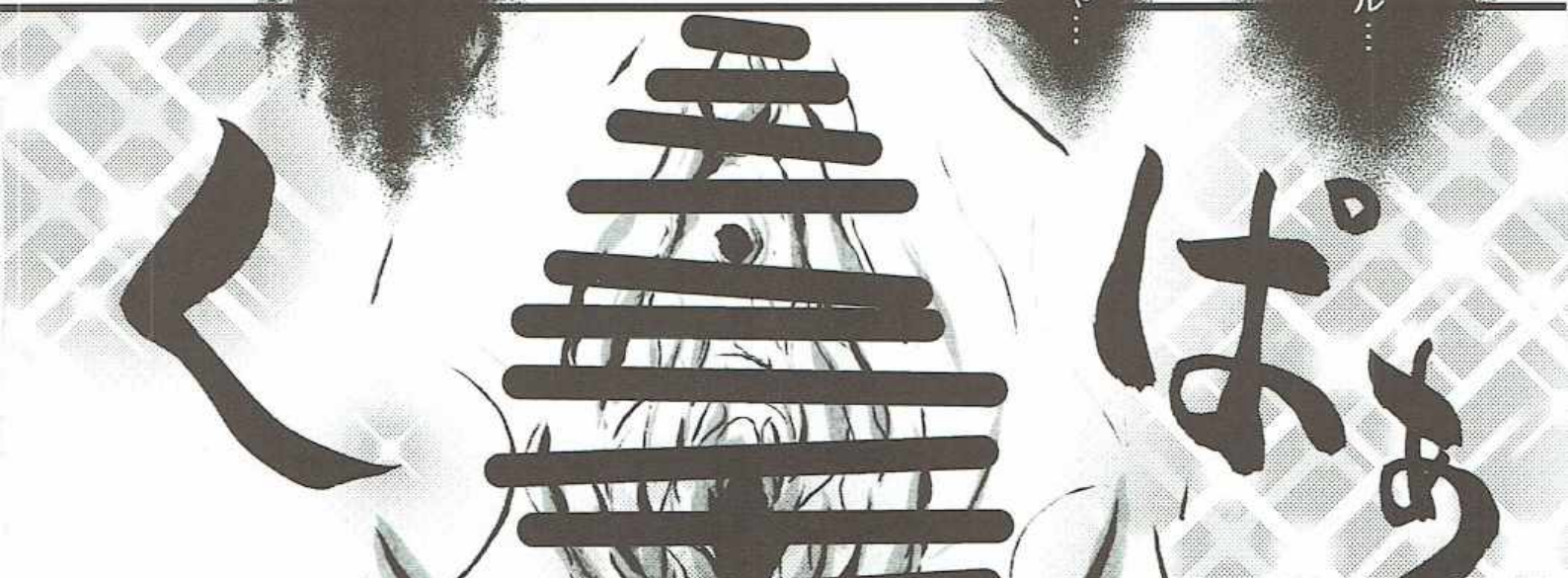


太い…

濡らさなきゃ…



尿道カテーテル…







あ

あ

あ

おしっこ…  
穴…

痛…



出る…

あ

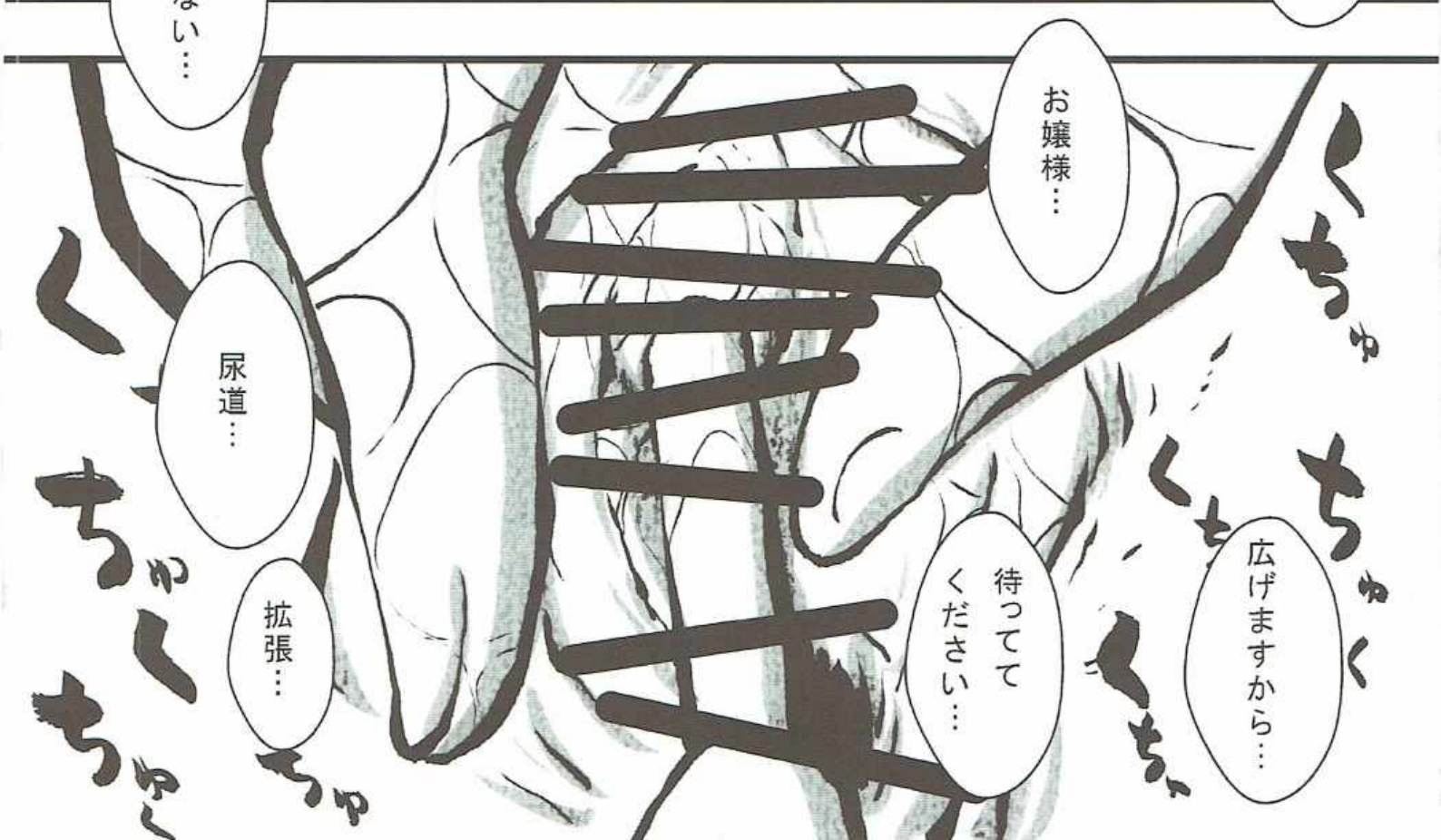
出る…

おしっこ

出ちゃう…

止まらない…

びゅっ  
びゅっ



お嬢様…

広がりますから…

待ってて  
ください…

尿道…

拡張…



ああああああッ

あッ

おしっしっ

あッ

あッ

全部  
出しますッ

あッ

あッ

お嬢様ッ

あッ

ピュッ

ピュッ

アアアア  
カカ

たぽ

そして…数週間後ッ

お嬢様っ

お待たせ  
いたしましたッ

尿道拡張

完了いたしましたッ

お嬢様のおちんちんで  
存分にお使いくださいませッ

咲夜の  
おしっこの穴



咲夜ー  
見てみてー

パチエにおちんちん  
作り直してもらったの

直径5センチの  
巨大おちんちん！

わあい♪

咲夜のおしっこ  
使っていいんだね♪

あ…

いや…

その…

楽しみ♪

無理ですう…

## おしっこの穴コラム③ ～尿道カテーテル～

男性の場合は尿道が長く、また前立腺が存在するので挿入が難しい。

女性の場合は尿道口の確認が困難で、極端に太った体型の場合は難易度が増す。清潔と愛護操作が必要である。

以前は挿入前に尿道口をイソジンなどで消毒していたが、近年は消毒をすることに意義がないことが判ってきており、消毒なしで留置されることが増えている。

挿入しにくいときには細く硬いカテーテルが通りやすいが無理に挿入すると尿道を傷つけることがあるので無理はしない。

カテーテルが前立腺に達すると特に抵抗があるが、前立腺を通過し膀胱に達すると抵抗が少なくなり、自然に尿が出てくるので、尿が出てくるまで挿入する。

カテーテルを留置しない場合は尿が排出し終わったらカテーテルを引き抜く。

女性の場合は尿道も短く前立腺もないので尿道口さえ見えれば簡単である。

十分な消毒が必要である。極端に太っていたり、高齢の場合は尿道口が見つけないことがあるので、間違えて膣に挿入しないように注意する。

バルーンカテーテルを留置する場合はカテーテルを末端まで挿入した後に、バルーンを蒸留水、もしくは専用のバルーン固定液で膨らませる。なお生理食塩水のように溶質に固形の物質が含まれるものをバルーン固定液として用いることは禁忌である。

溶質が析出してチューブを目詰まりさせた場合、抜去時にバルーンの排水が出来なくなる可能性があるからである。カテーテルの挿入が間違っていると尿道でバルーンが膨らんでしまうので、抵抗を感じたらやり直す。

バルーンが抵抗無く膨らんだら、抵抗を感じるまで少し引き出して導尿管用チューブをテープで下腹部もしくは大腿内側(女性)に固定する。膀胱内で膨らんだバルーンが抜け落ち防止の役割をはたし、カテーテルを抜く際には先にバルーンの蒸留水を抜いてバルーンをしぼませておく[1][3]。尿道口からや、尿の逆流によるカテーテルと蓄尿バックの接続部からの細菌の侵入には注意が必要である。

ウィキペディアより抜粋



# “人間”の驚かせ方

水山猫

雨上がりの午後、いつものように私はお嬢様と妹様のために紅茶を買いに人間の里へ行った。今日は顔なじみの店主が少しおまけのお菓子をくれた。これなら少し人に配ることもできるだろうか……

あ、今日は午後をお嬢様が自由に過ごしてよいと言ってたわね。何をしようかしら。いつもと違う道を通って、ゆっくり散歩しながら帰りますか。そうね、その時に会った方にそのおまけを配ることにしますか。

私はそうして、いつもの道ではなく命蓮寺のほうへ歩みを進めた。すると、

(???) 「小傘はあれだ、センスがない。傘にペロって……」

(???) 「なんと、わちきが時代遅れともうすか！」

あ、もうそんな時期でしたわね。この時期から予選の練習とは、頑張ってますわね。少し声をかけてみましょうか。

(咲夜) 「こんにちは、鶴さん、小傘さん。お笑いの練習ですか？」

(ぬえ) 「お、咲夜さんじゃないか。やっと小傘とコンビが組めてさー、今練習中なんだけどしっくりとこなくてね」

(小傘) 「ぬえちゃんが厳しすぎるんだよ……。あ、咲夜さん、おどろけー！」

(咲夜) 「いやいや、挨拶されてから驚かそうとしてもそりやダメですよ小傘さん。まだまだ修行が必要ですね」

(小傘) 「あくうう。あ、咲夜さん暇だったら、ネタを見てください」

(ぬえ) 「そうだね。私たちだけでは限界があるし、出来れば意見をくれないかな？」

(咲夜) 「わかりました。今日の午後はお暇をもらっているのです、ゆっくりみさせてもらいますね。あ、これ先ほど紅茶のおまけにもらったもので、よろしかったらどうぞ」

(小傘) 「わーい、ありがとう咲夜さん」



そして2人のネタが始まった。墓地で行う漫才なのだが、少しボケのふりが長いと感じた。ただ全体としては良い感じにまとまっていて、なかなかの出来であった。

(小傘)「どうだった、どうだった？驚いた？」

(咲夜)「驚きはしませんが、なかなかのレベルでまとまっていて、おもしろかったですよ。ただすこしボケのふりが長いかなくと」

(ぬえ)「ふむふむ……。咲夜さんありがとう、参考にするよ。あ、そういうえば今日は午後暇って言ってたよね。この後マミゾウさんが来るから、お菓子も一緒に食べたいんだけど……。どうかな？」

時間のある私は、やぶさかではないのでその申し出を受けることとした。

(ぬえ)「そーいや咲夜さんは人間な訳でしょ。まわりが妖怪だらけの幻想郷に居て疲れない？」

(咲夜)「そんなことはないですよ。私も“時を操る程度の能力”を持つおかげで、人間世界に居た時には化け物扱いされてましたから。ぬえさんなら化け物扱いされる苦しみがわかるでしょう？なので、私は今お嬢様・妹様に拾っていただいて本当にうれいんです。あと可愛いですしね」

(小傘)「あの2人に対して“かわいい”なんて言えるのは、咲夜さんぐらいだよお……。私はまだあの二人の放つオーラが苦手だよ……。あとわちきとちがって、すごい能力も持っているから……」

(？?)「お、ここにおったか。遅れてすまんのお。つと、これは紅魔館のメイドさんの咲夜さんじゃないか。珍しい客人がおるのお」

(ぬえ)「マミさん遅いよ。ネタの練習終わっちゃったじゃんか。代わりに咲夜さんにみてもらってたんだよ。で、少しアドバイスもらったから、予選までには修正してみせるからね」

(マミ)「わかったよおまえさん。そんな一言に言わんでおくれ。わしにも用事がある日だってあるんだからのお。あ、咲夜さんとやら、少しおもしろいものが手に入ったんだが、一緒に付き合ってもらえないかの？」

(ぬえ)「マミさん、何もってきたんだい？」

(マミ)「あ、小傘よ。これで今日はめいっばい“人間”を驚かせられるぞい」

(小傘)「？？」

(咲夜)「マミぞうさん、今日は時間があるので大丈夫ですけど……。いったい何をもってこられたのでしょうか？」

(マミ)「まあ、そう焦るな。人間界に長くいたわしに、あとはまかせておけばよい。つと、その前に、場所を変えるかの。わしの家に来てもらえないだろうか？ここからさほど遠くはないぞ」

ということ、私たち四人はマミゾウさんの家に移動した。まさか、ここで忘れられないことになるとは……

(？?)「ということらしいわよ、レミイ」

(レミ)「おもしろいことになってきたわね。咲夜に暇を与えるとどうなるかを調べてみようと思ってお休みをあげた甲斐があったわ」

(パチエ)「私の魔法グッズもたまには役に立つわね。あ、そろそろ始まるようね」

(マミ)「さてつと、それじゃ始めるかの。じゃあまずわしが手に入れてきたものなんだが……。これじゃ」

(小傘)「マミゾウさん、これはなあに？なんかぐにぐにゆるしてるし、ほこほこ丸いものがついてるけど……」

(ぬえ)「わたしもみたことないなあ……。マミさんまた外の世界から変なもの持ってきたね」

(マミ)「いや、これがおもしろいものなんじゃ。ちよいと小傘よ、これの使い方をそつちで教えてやるぞい。咲夜さんとぬえはちよつと風呂をあびてきなさい」

(咲夜)「お風呂ですか。構いませんが？ぬえさん行きましようか」

お風呂に入っていると、突然こんな声がきこえてきた。

(小傘)「マミゾウさん、もう、だめ……。もう、だめ……。おかしくなっちゃう！」





(小傘レミ)「おしっこを止めるためには、またいれてあげないとね。ほれほれ、いくわよ」

(咲夜)「いやあああああああ！また変なものが入ってくるううう」

(ぬえ美鈴)「あ、失神した。こがs……うん、レミア、満足した？」

(小傘レミ)「いや、わちきのひさしぶりのごはん、大変おいしくいただきました。でもまだもらえるなら食べたいな」

(マミフラ)「そうじゃのおく……もう1ラウンドぐらいは先ほどの薬はもつかの……」

(ぬえ美鈴)「小傘ってひつ気あるのかい？今すごくキラキラしてるけど」

(小傘レミ)「そんなことないよお。ひさしぶりのごはんで楽しんでるだけだよお」

(マミフラ)「おっと、失神から起きそうじゃの。そろそろ口調に注意するぞよ。」

あとぬえ、準備せい」……

(咲夜)「あれ、私、気を失って……？うん、ここは私の部屋かしら？」

(小傘レミ)「咲夜、大丈夫かしら？少し強くやりすぎたのか、失神してしまっただけれど？」

(咲夜)「って、お嬢様、その手に持っている物は……？」

(小傘レミ)「これ？もう一回いれてみようかしら？それともやめる……？」

うう、さっきは感じたことのない気持ちよさと、突然の出来事の驚きで失神してしまった……でも今はあれが愛おしい……

(咲夜)「お嬢……さま……それを、私に……私にいれてください」

(小傘レミ)「わかったわ、咲夜。たださつきみたいに失神したら、今度は美鈴に生えているこれも一緒に後ろから責めるわよ」

(咲夜)「美鈴、なんで男の子のあれがあなたに……？ああああ、お嬢様……おまちくだs……あああああああ」

(小傘レミ)「さてこれには穴があるから、そこからこれを注入して……」

(咲夜)「やだっやだっ、やめてえええええ。何かがおなかにはいつてええええええええ」

(小傘レミ)「さて美鈴。後ろから責めなさい。ほら、咲夜、後ろを突き出しな



# 咲夜さんの「お願い」

## 與七(よしち)

紅魔館のとある一室——いつもの場所で、いつものコトがまた、今日も始まる。  
「お疲れ様」

僕の目の前に立ち、短く芳いの言葉を掛けるメイド長の少女——十六夜咲夜。彼女の——咲夜さんの視線は、僕の顔一直線である。

「結局、一週間近く開いちちゃったわね。待たせちゃった」

咲夜さんはそう言うと、目の前に歩み寄り、ゆっくりと僕の唇を奪った。

「んむっ……」

柔らかくも甘い感触に、思わず僕は声を漏らした。同時に、咲夜さんの両手は僕の身体を弄る様に妖しく蠢く。

「ふふ……今日もいっぱい、楽しみましょう」

耳元で咲夜さんの甘い囁き声が出た。

外の世界からこの幻想郷に訪れて、数か月が経過していた。あの時の僕はどこにも希望が見えず、家を飛び出して当てもなく彷徨ううちに、気が付いたらこの地に迷い込んでいた。無邪気な妖怪に散々に弄ばれ、騒々しい妖精にちよっかいを出されながら、なんとか誰かまともな者がいそうな大きな館を訪れたものの、そこに入る前に門番の渾身の一撃を食らい、情けなくも気絶してしまった。気が付いたら僕の身体はベッドの上にあった。意識が朦朧とする中で、懸命に僕を介抱するメイドの少女の姿だけははっきりと覚えていた。それが咲夜さんだった。

それからなんやかんやがあって、結局僕は外の世界に戻ることはなく、この館——紅魔館で使用人として働くことになった。咲夜さん曰く、「これは運命なの。ただそれのことであった。また館の主人であるお嬢様曰く、「これは運命なの。ただそれだけよ」だそう。あまり深く考えないほうがいいのかもしれない。

さて、紅魔館で仕事を始めてから、僕は次第に咲夜さんのことが気になり始めた。頼りになる先輩として彼女をずっと見ていたが、いつしか僕の中で複雑な感情が渦巻き始めた。これが恋と言うやつなのだろう。だが愚かにも僕は、そんな感情を素直に彼女に訴えることなく、歪んだ形で処理するようになってしまった。咲夜さんが自分の部屋を開けている間に、こっそりと彼女の部屋に忍び込み、下着や服を拝借しては何度も自慰行為を行った。だが、そんな不埒な行為が

許されるはずが無かった。ある時咲夜さんに見つかってしまったからだ。

彼女は僕を軽蔑する目で見ていた。僕は涙目になりながら、必死に謝罪する他なかった。そんな僕に咲夜さんは冷たい声で言い放った。

「あなたの行為を、お嬢様に報告させて頂きます。おそらくは、厳しい処分になるでしょうね」

僕は許してください、と言いたかったが、声が喉から出てこなかった。だが、その次に咲夜さんから出てきた言葉が意外だった。

「ただし、私のお願いをあなたが聞いてくれる、というならば、この行為は不問に付すとしましょう」

いくらか咲夜さんの表情が緩んだ気がした。声も若干、優しく論ずような感じに聞こえる。

「お願い・・・？」

「ええ。私の個人的なお願いです。色々和我儘なお願いになりそうだけど。お嬢様以上に、ね・・・？」

妖しい笑顔を浮かべた咲夜さんは、いつもとは別人のように思えた。

その夜、僕は咲夜さんに押し倒され、女性の身体を知る事になった。初めての経験に僕の身体は興奮しっぱなしだったが、些か激し過ぎるようにも感じた。僕の身体を貪る咲夜さんはまるで獣の雌のようで、普段の瀟洒な姿はこれっぽっちも残っていないようだった。ただ、言動から察するに、彼女も相当ストレスが溜まっているようであり、その捌け口を前から求めていた様子であった。そのため、僕は咲夜さんの慰め者になったようである。

それから数日ごとに、僕は咲夜さんの部屋を訪れる事となった。普通にすることもあるのだが、彼女たつての希望で、様々な方法で僕たちは交わった。僕は弱みを握られている手前、彼女のお願いを断る事は不可能であった。最初は少し抵抗のある行為であっても、咲夜さんと一緒にそれを何度も行ううちに、次第にそれが快感に変わっていくように感じられた。

「ふふ、赤ちゃんみたいですね。可愛い」

柔らかで形の良い乳房に赤子のように吸い付く僕に、咲夜さんがクスクス笑いながら声を掛けた。僕は咲夜さんの命令で、一糸纏わぬ姿で奉仕していた。すでに股間のは膨張しきつており、少しでも刺激を加えられれば、たちまち発射してしまいそうな程興奮していた。

「おっぱいだけじゃなくて、ほら」

咲夜さんはそう言うと、スカートをゆっくり捲り上げ、純白のパンティを僕に見せつけた。

「こっちも、気になるんでしょう？ どう？」

小悪魔のような妖しい笑みを浮かべながら、咲夜さんは僕の顔を見下ろしている。

「見たいでしょ？」

「・・・はい」

「うふふ、素直ね」

咲夜さんは満足気な笑顔を僕に見せたまま、パンティを一気に下ろした。僕の目の前で、咲夜さんの秘部が露わになる。銀色の、薄めの恥毛に覆われた咲夜さんの大事な場所。何度も僕は目にしてはいるはずなのに、どうしても感情はいつも最大限まで昂る。何とか気持ちを抑えようとするも、抑えきれぬ自信が無かった。心臓の鼓動は大きくなるばかりである。

「はい、それじゃあ、エッチなおねだりしてもらおうかしら」

「あ、はい・・・あ、あの」

言葉がどうにも出てこない。

「正直に言えばいいの。『咲夜さんのおまんこ、舐めたいです』ってね」

咲夜さんの顔が少しだけ赤くなる。僕は何とか心を落ち着かせながらも、若干ドキドキしながらその言葉を繰り返した。

「咲夜さんのおまんこ、舐めたいです」

「・・・いいですよ」

咲夜さんは若干恥ずかしそうな顔になるものの、再び小悪魔のような表情に戻る。

それじゃあ、と言わんばかりに頷くと、僕は咲夜さんの秘部に舌を這わせた。先程までの行為もあるのだろう、女陰は少々濡り気を帯びているようである。

「あんっ……」

恥ずかしい所を舐められ、甘い声を漏らす咲夜さんだが、僕を見下ろすサディステイックな目つきは変わっていない。そんな咲夜さんの視線を受け、ますます僕の興奮度は増していく。僕はマゾヒストなどではない、と自分では思っていたが、この咲夜さんの「お願い」を受けてから、どんどんそんな存在に堕ちていくような気がした。

「もつと、激しくしてもいいですよ」

僕を見下ろす咲夜さんの顔が次第に紅潮していく。時々息を吐き、小さな喘ぎ声を上げる咲夜さん。僕はそんないやらしい仕草を繰り返す咲夜さんの視線の下で、舌を機敏に動かした。

「んっ……何だか、おしっこしたくなってきちゃった」

唐突な咲夜さんの言葉に、僕の動きが一瞬止まる。

「えっ……」

「このままでもいい？いいでしょ？」

ノーと答える暇は無かった。直後、咲夜さんの身体が小刻みに震える。

「んっ……」

咲夜さんが短い声を上げる。次の瞬間、僕が奉仕していた割れ目から一気に聖水が溢れ出た。

「うぐっ……」

完全に不意打ちだった。僕の口の中は、瞬く間に暖かく、塩辛い液体で一杯になる。反射的に口を離しそうになったものの、何とか堪え、そのまま僕は咲夜さんの小水を受け続けた。

「ちゃんと飲んでくださいね」

僕を見下ろす咲夜さんが、尿を注ぎ込みながら無邪気な声で言う。咲夜さんにおしっこを飲まされている。きついアンモニア臭のする、泡立った液が口内を満たしていく、その感覚が僕の気持ちに更に昂らせた。下半身がより一層熱くなるような気がした。僕の勃起した一物が、微かにビクビクと上下する。しかし、い

くら愛しい咲夜さんの出したものとはいえ、尿は尿である。本来ならば口にするものではないというのは明らかだ。容赦なく僕の口に流れてくる咲夜さんのおしっこ。何とか飲み込もうとするものの、強烈に濃い味―形容し難い、しよっぱさど苦さが混じりあったモノ―のためか、全部受け入れることは到底無理だった。

「ぐうっ……」

飲み切れなかった咲夜さんのおしっこが、僕の口の両端から零れていく。咲夜さんはそんな僕の無様な姿を見て、クスクスと笑った。

「もう、はしたないわね。零しちゃって」

「……」

僕は何とか、飲める分だけ飲み込むように努力した。それでも、かなりの量のおしっこが僕の口から零れ落ちていた。何とか我慢しつつ、最後の一口をこくり、と飲み込むと、反射的に思い切り咳き込んでしまった。強烈で濃いおしっこの味のせいだろう。今になって喉の奥がとても苦しくなった。

「あ……大丈夫？」

激しく咳き込む僕の姿を見た咲夜さんの顔に、不安の表情が浮かび上がった。さつきまでとは、全く異なる顔である。流石に、これはやり過ぎと思ったのかもれない。

「申し訳、ごさいません。げほっ」

喉を鳴らしながら、僕は咲夜さんに詫言った。今になって気づいたが、僕の目は若干涙で潤んでいた。

「……」

「心配は無用です。お気になさらず」

無言で僕を見つめる咲夜さんに対して、僕はなんとか気丈に振る舞う事を意識した。前々から行われている「これ」は、咲夜さんのお願いなだから、少しでも咲夜さんが気分を害するのは良くない。そう、今までだって色々なプレイを提案され、その度に狼狽しながらもなんとかこなしてきたのだから、これぐらいどうということはない。前と同じく、すぐに慣れてしまうことだろう。ただ、そんな自分が少し恐ろしくもある。

「あの……」

「僕は大丈夫ですから」

短く答えると、僕は深呼吸し、とりあえず気持ちを落ち着ける。数秒の後、僕はもう一度咲夜さんのアソコに口付けし、舌を動かす。

「やんっ……」

秘部を再び刺激された咲夜さんは、いやらしい声を上げた。不意打ちの仕返しであった。声の元へ視線を動かしてみる。顔を赤くした咲夜さんの顔が僕の瞳に映った。咲夜さんの恥ずかしい穴を舌で直接綺麗にする。不潔な行為だという感覚は無かった。むしろ僕にとっては、神聖なる儀式のようにすら感じられた。

「んんう……ちよっ」

若干嫌がるような声にも聞こえたが、本気で抵抗しないあたり、続けてほしいという気持ちはあるのだろう。僕はしばらく、咲夜さんの排尿の後の穴周りを丁寧に舐め続けた。

「もう……いいのに」

「いえ、しっかりと綺麗にしてあげますね」

僕は咲夜さんの顔を見上げながら言う。やはり、おしっこを出した後はきつちりと綺麗にしてあげないといけない。何より、今の僕は咲夜さんの下僕みたいなものだからだ。じつくりと、綺麗に掃除することを心掛ける。これまででもそうであった。咲夜さんの楽しみの後始末は、僕の役割だから当然である。

「仕事熱心ですね」

咲夜さんの顔は、いつの間にか余裕のあるものに戻っていた。そしてその視線は、僕の屹立した下半身の一部分に向けられる。

「ありがとうございます。それじゃ、御褒美を差し上げますね」

咲夜さんは笑みを浮かべながらそう言うと、腰を落とし、僕のギンギンに勃起した男根を優しく諸手で包み込む。ゆったりとした動作であったが、今までの所為で敏感になっていたアソコを触られると、思わず体が震えてしまう。

「うっく……」

咲夜さんにペニスを触られ、僕は情けない声を上げる。とにかく、感情を「我慢」に集中させないといけない。ちよっとした刺激で、すぐに果ててしまえば良かったからだ。

「もっとう気持ちをよくしてあげますよ」

甘い声で囁く咲夜さんの顔を見て、僕は赤面していた。

紅魔館の一日は、普段通りのまま過ぎようとしている。だが、今日の夜はどうだろうか？そろそろ、咲夜さんに「お願い」をされるはずである。最初は興奮よりもむしろ戸惑いの方が大きかったが、今では今日はどんなことをするのだろうという、期待の感情が芽生えつつあった。

「お疲れ様です」

「仕事終えたらしい咲夜さんが、僕の目の前にいつの間にか立っていた。

「ごめんなさいね。まだちよっつと、時間が掛かりそうで」

「あ、いえ……」

残業か、と僕は思ったが、まさかその後、僕もある種の「残業」を申し付けられるとは思わなかった。

「とりあえず、先に言っておきましょうか。今日の夜のお願ひ事を」

咲夜さんはそう言うと、僕の耳元に口を近づけた。

「今日は、この前とは逆で」

「え？」

その言葉の意味が良く分からなかったが、次の言葉で僕は理解した。

「あなたのを、飲んでみたいなー、なんてね」

「ええっ？あ、あの、咲夜さん……？」

「しっかりと水分を採って、溜めておいて下さいね」

「……いや、それは」

「あら、それじゃやっぱりー」

咲夜さんは顔を赤くしながら、手をもじもじさせた。

「やっぱり、飲む方が好みなんでしょうか……私の……その、おしっこを」

咲夜さんに続いて、いやむしろ咲夜さん以上に、僕の顔が真っ赤になった。



# 表

## 作とくだい

私、十六夜咲夜には秘密がある。

その秘密を持つきっかけは半年程前のある日に私がパチュリー様に紅茶を淹れてからの帰り道にできたもので、私が帰り道を歩いていると、表紙のない本が一冊落ちていたのを見つけた。普通の本ならばタイトルなどであるべき場所がわかればそこに戻すのだが、重要なタイトルがわからないとなれば話は別だ。私は内容からその本のあるべき場所を判断するためにという建前のもと、好奇心からその本を開いた。その本に書いてあった内容は尿道の開発についての本であり、歳相応の性知識しかない私には新鮮なものであり、そこから私は尿道開発に興味を持ち始めたのだ。

本に一通り目を通すと、私は小悪魔を呼んで本を仕舞っておくように言いつけた。私は一刻でも早く本に書かれていた事を実践してみたかったのだ。

その晩。

私は本に書いてあった通りにクリトリスの下あたりにあるという尿道口を刺激してみた。普段自慰をする際に刺激するクリトリスに比べると穏やかな快感だが、いつもの自慰では得られないその不思議な快感に私はすぐに虜になってしまった。尿道口だけでなく、同時に乳首も刺激すると更なる刺激が得られ、刺激を続けるうちに私は絶頂を迎えた。

その日から私の日課の一つに尿道開発本の読書が追加された。本を読む間は時を止めているので、誰かに見られる心配はなかった。本を見つけた日から少し経った日の夜から私は部屋にいる間に時折、妙な視線を感じるようになった。視線

# 裏

## 作とくだい

私、レミリア・スカーレットには一つの秘密がある。

そのきっかけは半年程前に一つの夢を見た事であって、その夢では咲夜がどういった経緯かはわからないけれども私の目の前で自慰をしていたのだ。それも、尿道で。そんな夢を見た私はあるうことかソレを現実にならしてみたいと、普段美しく、気高い咲夜が乱れる姿を見たいと強く思ってしまったのだ。そして私はパチュエに彼女の蔵書のうちの二冊―尿道での自慰に関するもの―を一日貸すように依頼した。パチュエから色々根掘り葉掘り聞かれたが、それらは適当に流した。

私は借りた本を丁度、パチュエに紅茶を淹れに来た咲夜がその帰り道に発見するように、発見しても本を開かず本棚に戻さないように念のため、本を開くように運命を操ってから、図書館の通路に置いた。

最後まで運命を操ることができなかった卑怯な私は咲夜が知識を得た後にどうするのかの最後の判断は咲夜に任せることにしたのだ。

その晩、私は自慢のデビルイヤーを活用して咲夜の部屋に聞き耳を立ててみた。すると、丁度自慰の最中だったのだらう。咲夜の部屋から嬌声が聞こえてきた。つまり、知識を得た咲夜はそれを実践することを選択したということだ。私は当然だがその場にはいないので、行為の音声を聴くことだけしかできなかったが、それでも咲夜の嬌声を聞くだけで咲夜のだからしない、それでいて淫らな表情を想像することは容易にできた。次第に咲夜が昂つてくると、それに比例して音量も大きくなり、一際大きい嬌声を上げるとそれ以降嬌声は聴こえなくなった。それは咲夜が絶頂を迎え、自慰を終えた事を意味し、私はそれを理解してからや

を特に感じるのには自慰をしている時間なので、不埒な輩が良からぬことを企んでいるのではとも思ったが、部屋の様子が特に変わっているわけでもなく、私に關する変な噂が流れることもなかったので気のせいだと思ふことにした。

視線を感じるようになってから三日ほど経った日の事だ。私はいつも通りパチユリー様に紅茶を淹れたのだが、その帰り際にパチユリー様からここ数日、夜になるとお嬢様がパチユリー様の使い魔を使って私の部屋を覗いていると教えられた。

なるほど、最近感じるあの視線はお嬢様からのものだったのか。つまり、理由はわからないがお嬢様はここ数日の私の自慰を、私の淫らな姿を見ているというわけで、そう考えると私はあるうことか羞恥の感情よりも強い興奮を覚えてしまった。私は狼狽えないように努めながらパチユリー様に適当な返事をする、その場を立ち去った。

その日の夜も私は自慰をするわけだが、やはり、視線を感じる。

パチユリー様の話が本当の事ならば、お嬢様は今まさに私の部屋を覗いているわけで、そう考えると私はまだどこも弄っていないのに強い興奮を覚えていた。あまりに昂ぶっていた私は服を脱ぐ際の衣擦れだけで既に濡らしていたし、指が少し触れただけでいつも以上に声を漏らしたし、表情もすぐに崩れるしでとても誰かに見せられるようなものではないみっともないものになっていた。

そんな状態の私はいつもよりかなり短い時間で絶頂にまで至り、失禁までしてしまった。私は呆けながら自分の股間からシートに流れる黄金色の液体を眺めていたが、やがて我に返るとさすがにこれを処理している姿をお嬢様以外の誰かに見られてしまうわけもいかなないので、いつもの通りに時を止めて後処理を始めた。

本を読み進めるにつれ私の自慰は過激なものとなっていく、二ヶ月も経った頃には尿道口への刺激だけでは満足行かないようになっていた。そして、私は挿入した際に尿道を傷つけにくくするために針金の先端を溶かして丸めたものを消毒してから尿道に挿入した。多少の痛みを伴いながらも尿道に針金を挿入する

つとこれでは咲夜が尿道を使って自慰をしているのかがわからないことに気がついた。

次の日、私はまたしてもパチユに依頼をした。今度は映像の送信と受信のできる一対の使い魔を貸してほしいというものだった。流石に連続して依頼を出しているせいか訝しがられたが、彼女はその依頼を引き受けてくれた。パチユは準備があるため使い魔を召喚するまでには一週間ほどかかると言ったので、パチユに無理をしないように釘を刺すと図書館を離れた。こればかりは仕方がないので使い魔が召喚できるまでは昨日のように音声だけで咲夜の自慰を楽しむことにした。

それから五日後、パチユから待望の使い魔が召喚されたと伝えられた。一週間ほどかかると言われていた使い魔の召喚を五日間で仕上げたのはパチユの技量によるものか、無理をした賜物なのか。それは後者であるうことはすぐにわかった。私が図書館に行くとパチユは眼の下にクマを作っていたのだから。私はパチユに労いの言葉をかけた後に無理をしないようにと釘を刺したのに、それを無視したことを糾弾すると、パチユはつい夢中になってしまつてねと笑いながら言ったので、私はこの魔女には何を言っても無駄だと前から知っていたことだが認識すると、とにかく早く休むようにと言つてからそれらを受け取った。

それからすぐに咲夜を呼びつけると、適当な理由で買い出しに行かせ、その間に映像送信用の使い魔（これには阿という名を与えた）を咲夜の部屋に設置した。あとはこつちの映像受信用の使い魔（こちらには吽の名を与えた）に阿の見える映像を受信させれば咲夜の咲夜の部屋の様子が観察できるという寸法だ。

その日の晩、私はさっそく阿吽を使って咲夜の部屋の様子を観察してみた。部屋にいる咲夜は胸を露出させていて、私の思惑通り、尿道を使つての自慰を行っていた。尿道口を刺激しながら、適度に乳首にも刺激を与える自慰。咲夜が本を見つけてから一週間ほど経つていてもその手つきはまだぎこちなく、それが

と、私はすぐに激しい尿意に襲われた。尿意を我慢しながら挿入を続けると、やがて針金の先端が何かに当たってそれ以上に進まなくなった。おそらくこれが膀胱なのだろう。膀胱に先端を当てすぎないように針金を出し入れしていると次第に尿意が我慢できなくなり、ついには失禁してしまった。普段の自慰でなる失禁とはまた違った感覚で、私はこれが癖になってしまった。

こうして、私は尿道に物を挿入することを覚えた。

日が進むのに比例して挿入する物の太さも太くなり、最近では細いペン程度なら尿道を解せば挿入できるようになっていた。私は今日もいつもの時間に自慰をする。やはり、視線は感じるので今晚もまたお嬢様は私の自慰を覗いているのだろう。まずは準備運動ではないが尿道口を軽く刺激して解し始める。尿道がある程度解れると、今度は右手で中身を抜いてあるペンを持ってゆっくりと挿入し、出し入れする。開いている左手を放っておくのももったいないので、右手で尿道にペンを挿入しながら、左手で乳首を弄った。二つの刺激に私はたまらず口が開いてしまい、口元からは唾液の筋も出来ていた。

ふと顔を上げると、鏡に映っただらしない姿の私と眼が合った。思い返してみると、私が自慰中の私を見たのはこれが初めてかもしれない。そして、こんな淫らな姿を普段からお嬢様に晒しているのだと考えると、私は自分の意志とは関係なく身体を痙攣させて絶頂を迎えた。

絶頂を迎えてから暫くは肩で息をしながら休んでいたが、自分の意志とは関係ないタイミングでの絶頂だったせいも、どうにも物足りなさが残っている。そういうわけなので、少し落ち着いてきた私は再び自慰を始めた。今度の自慰は先程の物足りなさを埋めるように、若干激しいものになっていて、声もそれに釣られて大きく出ってしまった。先程までの自慰の影響か、それとも、普段よりも刺激を強くしているからなのか、得られる快感は先程までとは比べ物にならず、私はあっけなく二度目の絶頂を迎えた。

この絶頂で私は身体力が抜けてしまい、背中からベッドに倒れこんでしまった。

また彼女を愛おしく思わせた。自慰をし始めたばかりの頃こそ、まだ表情も崩れてはおらず、嬌声もそこまで大きくは出ていなかったのだが、行為の中盤あたりから段々とその表情は崩れていき、それに比例して嬌声も大きくなっていった。やがて、普段の咲夜からはおよそ想像のつかないだらしない表情を晒し始める頃には絶頂も近づいてきて、彼女の嬌声もより一層大きくなっていった。程なくして咲夜は絶頂を迎え、身体を軽く痙攣させるとそのまま失禁までしてしまった。失禁してからはしばらくは放心状態だった咲夜が我を取り戻すと、汚れたシーツやらなにやらがパツと新しい物に取り替えられていた。おそらく彼女は時を止めて粗相の後始末をしたのだろう。

それからすぐに咲夜は眠ってしまったので、私も阿吽の機能を止めた。元々咲夜にはそういう気質があったのだろうか、咲夜の行為は日を増すにつれて過激になっていき、始まりの日から二ヶ月も経つ頃には行為も手慣れてきて、尿道口を刺激するだけでは物足りなくなったのかついに尿道に物を挿入するようになり始めた。

初めは細長い針金のようなものから次第にその太さは増していき、この頃は細いペン程度なら解せば挿入できるようになっていた。

そして、咲夜は今日も自慰をする。

普段通り、まずは尿道口を軽く刺激して解し始める。それがある程度済むと、今度は中身が空洞の細いペンをゆっくりと挿入し、出し入れする。その際、咲夜は乳首にも適度な刺激を与え、更なる快感を得ようとしていた。この頃になると、咲夜はすぐに表情を崩れさせるようになり、自慰を始めてまだ大した時間も経っていないのに閉わらず、既にその表情は蕩けたものになっていて、淫靡な雰囲気も漂わせていた。

やがて、咲夜は軽い痙攣とともに一度目の絶頂を迎えると、その余韻に浸るようになり脱力していたが、しばらく経つとまだ物足りないのか再び自慰をはじめた。二度目の自慰は先程よりもさらに激しさを増していて、嬌声も一段と大きく、艶のあるものになっていた。

先程の絶頂の余波のせいも、二度目の絶頂に至るまでは一度目よりも時間は

それから少しして、水音とほのかな温かさを感じて私はやっと失禁していることに気がついたが、もはや今はそんな事などどうでも良かった。心身共に落ち着いてきて、私は自慰の後処理を行った。いつも通り、時を止めてシーツを洗い、予備のものと取り替え、いつものベッドの状態に戻すだけの単純な後処理だ。それが終わるとちやうど眠気が私を包み込んだので、私は消灯して眠ることにした。

消灯の直前にふとした悪戯心で視線の元―おそらくはそこから部屋を覗いているのである―お嬢様はまだ気がついてないのかもしれないですけど、私はお嬢様が見ていることに気がついてるのですよという意味を込めた笑みを向けると、私は眠った。

かからず、すぐに咲夜は大きく背をそらして絶頂を迎えると、失禁した。くたりと倒れて肩で息をしている咲夜と、挿入されているペンから咲夜の尿が流れている様を見ていると、私は普段気高い咲夜が夜になるとこんなに乱れていることを私だけが知っている優越感に浸れた。

それから間もなく、咲夜が自慰とその後の処理を終えると、消灯の直前に一瞬だが咲夜がこちらを向いて微笑んだような気がした。

# 遙か聖水の縁

八雲 信宗

むかしむかしあるところに。

そう、これは昔話。表立って語られることのない物語。

登場人物たちはみな、境界の向こう側へと去った。それゆえに、もはや記録も記憶もされていないはずの伝承——『外の世界』においては、だが。

銀の少女がいた。時を操る異能を宿す少女が。

恵まれた、とは言い難い境遇にあった彼女であるが、その異能ゆえに見出され、幼い身ながら化物狩りを生業として糊口を凌いでいた。

彼女が狩る『化物』というのは、大雑把に言えばゾンビもしくは一食屍鬼（グール）と、それらの親玉たる吸血鬼である。いずれも積極的に人間を害し、食物兼眷属などとして数を増やしていく存在だ。人界離れた地でひっそりと暮らす妖怪たちと異なり、これらは人の世に紛れ、人の世の中で殖えて人の世を喰らう。したがってこれらの討滅を業として営む者も出てくるわけである。

この日、彼女が獲物と定めたのは大物の吸血鬼。郊外の紅い館に住む、かの一串刺し公（ヴラド・ツェペシュ）の裔と称する幼き月であった。

抜かりはないはずであった。

一領主（Lord）を名乗れど、領地も領民も既に無し。確かに本人は強大な吸血鬼のようであるが、部下は僅かに門番一人、居候の魔女と妹の他は屋敷の住人すらいない。付き合っても悪く外交も下手、その上少食で眷属を増やすことすらままならぬ。現にこの吸血鬼に襲われ、人のまま生還した者もそれなりの数確認できたほどである。

であればこそ、考えるべきであった。屋敷は荒れるに任せたまま、野良の妖精や下つ端悪魔の遊び場と化しているような有様。それでいてなお討滅もされていなければ魔族同士の争いで滅ぼされてもいないのは何故か、ということ、気づけぬ少女ではなかったはずである。

しかしながら、少女はこの不審点を希望的観測で説明付けてしまった。名門の

吸血鬼すら斯く落魄れるほど、今の世は人間の世なのであると。そうして人間に追われ、弱った吸血鬼など格好の標的に過ぎないのだと。

——覚悟せよ吸血鬼。貴様は今や狩られる側だ、と。

居眠りを決める門番を、魔力が込められたナイフで拘束。少女は難なく館に侵入した。

時は正午近く、吸血鬼ならば寝ているであろう時間帯である。不用心極まりない、なんと無様な。心中でそう呟きつつ、荒れ果てた館内を少女は進む。

前庭はもはや草叢と化している。門番が通っているのである。獣道のみが土の色を見せ、他は一面の緑。軋む扉には鍵も門も掛かっておらず、あっさりと少女を迎え入れた。こうもボロくては敵めしい装飾も却って滑稽である。

元は豪奢だったのであろう玄関ホールを抜け、弱った神秘の残り香——妖精や下級悪魔共を睨め付けあるいは蹴倒して、探すのは主唯一人。

魔女狩りの時代も遙か遠く、人の世に害を為さぬ限りは魔女など取るに足らぬ存在、少女にとって狩る価値はなかった。教会が手配書を出し、討伐者に賞金を与える……化物狩りで稼ぐというのはつまり賞金稼ぎである。よほどの大物でもなければ端金にしかならぬ魔女には、割く時間すら惜しかった。

そうして二階、玉座の間に至った少女が、待ちわびた様子の主と対面し、僅かに言葉をお互いに交わす。

「いらっしやい、運命の人。待っていたよ」

「……死期を悟ったか、化物。殊勝だけど手遅れ」

「それはもっと先、私にも見えない未来。貴女と共に歩む先のね」

答えの代わりに少女が放ったナイフが、開戦の号砲となった。

難なく躲した吸血鬼の目は、次に銀の華を見た。眼前を埋め尽くす、ナイフの大輪。

初弾を投げた少女は、その行く末を見る以前に次発を仕込んだのだ。自身の時

の流れを加速し、また位相をずらし、手持ちの数を遥かに超えたナイフの弾幕を張る。少女の必殺だ。今までこれを躲したモノはいなかった。

呆気なく、勝負は付いた——少女の敗北で。

「え」

間抜けな声を溢す少女。無理もない。読まれていたのだ。攻撃どころか着地点まで。

化物は確かに人間がとても及ばない身体能力を持つ。しかし少女の異能は、その化物をして認識不可能な速さを齎すもの。超常の眼を持って尚躲すことはおろか見切ることもできないはずであった。

それが、まるで戯れに飛びつく恋人を抱きとめるかのようにあっさりと。少女の体は吸血鬼の腕に収まった。

間近で見れば、吸血鬼は少女、いや幼女と言っていい姿かたちをしていた。少女自身よりほんの少し……人間なら一年か二年ほど年上、それぐらいだ。

「可愛い子。だけどおいたが過ぎる。お仕置きは何がいい？」

耳元で囁きかける声に、思わずぞくりとする。魅了の魔法でも掛けるつもりであるるか。

少女が振りほどこうとすると、吸血鬼はすんなり縛めを解いた。

「情けのつもり？」  
飛び退いた少女が問う。次に異能を使えるようになるまで数秒。向こうが会話に乗るなら、時間稼ぎには丁度いい。

「いや。七縦七擒、だっけ？」

「何のことだ！」

「東洋のことわざ。服従させたければ、実力がわかるまで捕らえては放て、ってね」

「ほざけ、出来損ないが！」

屈するものか、と少女は歯噛みする。つまるところ、こちらの異能に目をつけて自身の眷属にするつもりなのだろう。普通なら、さつき後ろから抱きとめたと

きに嘔んでしまえば、如何にも吸血鬼という絵面が見られただろう。そうしなかつたのは、できないから。事前の情報通り、致死量の血を吸えぬほどの少食で、まともに眷属を増やせない——出来損ないなのだ、こいつは。

時は満ちた。今度は全周を囲ってやろうと、少女が動く。

「はい、二回目」

首筋に湿った感触が走った。銀の槍倉はその頸に何も捉えることなく地に落ちていく。捕らわれたのは少女自身だ。

「自分の時間と空間を操るのか……でも、神秘の薄れた今の世じゃ、体の中で精一杯、違う？」

再びの怖気。一度目に囁かれたとき、あるいは二度目に舐られたときの、官能を含むそれとは違う。純粹に、見透かされた恐怖であった。

「一緒においで。近々、もつと神秘の濃いところに引っ越すから。そしたら貴女は時空の支配者にもなれる」

確かに少女はそう言われたことがある。もしも、太古の神代にでも産まれていたら、と。

返答は刃だった。いくら怪力でも、二本の腕では完全拘束など不可能。吸血鬼の顔は少女の左肩にあり、右脇腹の後ろあたりは死角のはずだった。

「おっと」

容易く躲されるが、そこまでは狙い通り。再び距離を取ることに成功したが、異能のタイムラグが一瞬だけ残る。

「そろそろこっちの番か」

慢心であろうか、吸血鬼は戯言で自身の手番を捨てた。

「死ね！」

再び現れる銀の槍倉……もつとも、柄は遙かに短い。三度目は立体的に包囲した。その中に、吸血鬼はいない。

「予想通りだ」

三度自身を抱き締めに来るであろう吸血鬼を出迎えるのは、後ろ手に持ったナ

イフ。向こうから勝手に刺さりに来てくれるはずであった。刹那。

「みぎうで」

吸血鬼の音が聞こえた。

「ッあ、あああああっ!？」

少女の右手に飛び込んだのは吸血鬼ではなく、魔力でできた投槍。腕を貫き、穂先が背中に触れている。

少女とて化物狩り。年に似合わぬほど、痛みには慣れていくはずだった。だがこれほどの重傷は初体験だ。相手の特性上、傷を負わぬように戦ってきたこともある。不意を突いたその痛覚は、少女に叫びを上げさせるに足るものだった。

「次はきちんと見るのよ。——ひだりかた」

残酷な宣告。正面に降り立っていた吸血鬼はそう告げて、投擲体勢に入る。異能はまだ使えず、痛みは動きを鈍らせる。躲せるかどうか。

吸血鬼の手に槍が生じ、放たれる。横っ跳びに逃れた少女は異様なものを見た。虚空にあった槍が、進路を変えたのだ。

後世の人間であればミスイルと勘違いするであろう動き。少女の体——それも左肩を綺麗に追尾して飛んでくる。哀れ、少女は宣告どおりに左肩を射抜かれ、そのまま壁に縫い止められた。

「いぎっ」

苦悶の声上がる。

「可愛い声で鳴くね。折角だし、もつと聞かせておくれ」

吸血鬼は両手に魔槍を生み出した。

「みぎあし」

左手の槍を投げる。ふわふわとした軌道を描くそれはしかし、それが当然だと言わんばかりの滑らかさで、明らかに物理法則を無視して飛んだ。

槍は本来、自ら推力を生みはしない。だがこの槍は鳥か何かの如く、少女の右脚へ飛来し、突き立った。

「うっ……あ、あう」

「もうわかるだろう——ひだりあし」

先程の焼き直しだ。てんで見当外れの方向へ、弱々しく投げられた紅い槍は、寸分の狂いもなく少女の左足を蹂躪した。

「……ッひぐ」

最早悲鳴も上がらない。少女の精神は折れかけていた。

「襟の出来上がりだ。この眼は運命を見、この手は運命を操る」

悠々と少女の下に歩み寄る吸血鬼。このときに限っては少女にも死の運命が見えた。

「殺すなら……ころせ」

「私のもになれ。そうすれば助けてやる」

覚悟を決める少女に対し、生きる道を示す吸血鬼。お決まりの台詞だ。

「亡者に、なってまで……この世に……未練なんて」

それはただの強がりではない。生の楽しみを知らぬほどではないにせよ、齢十を幾らか過ぎた程度で鉄火場を渡る生活は、少女から未練を奪うに足るものだった。

「これまたお決まりね。その年でヴァンパイアハンター、しかも異能持ち。世に馴染めず溶け込めず、孤独ってわけか……だったら尚更、一緒においで。貴女はもうこっちの存在よ」

「だが……化物だ……っ」

吸血鬼は優しく、教え諭すように語りかける。

「そう、貴女は人間。私は貴女を化物にはしない。もうこっち側の人間なのだもの。考えてごらんよ。太古の神秘を宿す人間の居場所は、一今の世の中《ひとのよ》じゃなくて「こっち《幻想》の世界。近々引越すって言ったでしょ？ その前に、メイドの一人ぐらい雇って欲しいと思うって。ただ私に雇われる、それだけで貴女は貴女がいるべき世界に行ける。こない話ないと思うけど」

少女に迷いが生まれた。化物に成り果てるわけでもない。人間世界に義理立てすることも、思い入れも大してない。死の恐怖を克服しているわけでもない。先程は諦観ゆえに受け入れようとしていたが、命を長らえる選択肢は目の前にある。少女に揺れを見て取って、吸血鬼は止めを刺しにかかった。突き放した口調を

装い、告げる。

「ま、その年で死にたいってんなら仕方ないけどね。——しんぞう」

魔槍を構え、酷薄な笑みを浮かべて一瞥。脆くなった少女の心は果敢なく崩れた。

「ひ……し、死にたくないっ！……あ、ああ……」

水音が響く。心と同時に尿道も崩れたようだ。

「うん、決まりだね……ん？ おやおや、おもしろいか」

今度は羞恥に殺されかける少女。目からは涙も溢れている。

「まずは傷の応急処置ね」

そう言って吸血鬼が手中の魔槍を消す。同時に少女を縫い止めていた四本も消え、魔力の残滓が傷を塞いだ。

「これで痛みはましになったでしょ。本格的な手当は後であいつにやらせるとして……」

「え、な、なにを」

少女が驚くのも無理はなかった。たった今自分の主になったはずの吸血鬼が、自身の着衣と下着を脱がせ始めたからだ。

「未熟者のメイドの世話は一主《わたし》の務め。何か文句ある？」

「だって、恥ずかし」

「そのうち伽くらいするんだから、今から慣れときなさい」

伽。伽と言ったか、この吸血鬼は。ということは——そこで少女の思考は途切れた。

脚を広げられ露わになった少女の秘部に、吸血鬼がしゃぶりついていて。

「ひゃあっ！？」

「んーおいし。甘露甘露」

いかにも美味、といった風に体液を吸る吸血鬼。それが血であれば妥当な光景であるが、目の前の薄縹めいた銀髪は自身の股間に埋められている。

「や、そんな、きたなっ、ふああ！？」

気づけば秘貝はすっかり寛げられ、吸血鬼の舌はその内側を余さず蹂躪してい



た。純潔の証たる緞帳も、未だはつきり姿の見えぬ淫恋も、そして——ぶしや、ぶしやと、再び雫を溢し始める、小さな孔も。

少女は初めての感覚に翻弄され、意識を騷られていく。

「聖水とは、んぐ、よく言ったものね」

「はああ、んあん……ああ、っ」

吸血鬼の尿管は優れたものであった。性の悦びなぞ知らなかったはずの少女が、僅かの内に昇天寸前である。

「貴女美味しいわ、愛液も、」

言いつつ、吸血鬼は喉を掻き分け、舌を肉洞に潜らせる。舌と肉壁の隙間から、

白く粘った濃い雫が零れた。少女の悶えが一層激しくなる。

「そこ、あん、はいっっちゃ、らめ、ほうん」

舌を引き抜き、吸血鬼は次の獲物に絡みついた。

「聖水も、ねっ」

「やああ……」

尿孔を責め立てる舌に少女は容易く屈服し、湧き水の如く尿を吸血鬼に捧げた。しばしそれを啜り、吸血鬼は満足したように嘔く。

「んくっ……こちそうさま。ご褒美に、墮としてあげる」

手には魔槍。しかしその形は先程と異なり、短く太い。少女がもう少し房事の方面に明るければ、張形にするつもりだと気づけたかも知れない。

「い、痛ああ！」

叫ぶも、それは一瞬。槍から流れ込む魔力は痛覚を和らげ、快楽を与える。一瞬前まで未通だった少女は、既に人外の法悦を味わっていた。

「あ、あはあ、っ、な、なにか、きちや」

絶頂の予感に身を震わせる少女。淫槍を伝う処女血を舐め取りつつ、吸血鬼が問う。

「気持ちいい？ 気持ちいいんだね？」

しかし少女は返答すらままならぬほど、快感に吞まれていた。それでも微かに首肯したのを見て取った吸血鬼は、二度目の止めを放つ。

「力を抜いて、気持ちよさに身を委ねなさい……そらっ」

掛け声と共に淫槍は臍奥を優しく、しかし深く抉り、舌と指は少女の真珠を剥き出して騷り、更に尿孔を鏝掛ける如く舐め上げた。その責めに、少女が耐えられるはずもなく。

「はあ、あ、あ、う！ んあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、う！！」

達し、失神した少女から、三度聖水の噴水が上がった。

「あ、おい、し、んっ！」

それを顔面で受け止め、味わったところで、吸血鬼も気をやったらしい。満足気に少女の下腹部へ身体を預けるのであった。

以上が吸血鬼レミア・スカーレットと、後に十六夜咲夜の名を賜る少女の出会いである。

なお咲夜のメイドとしての初仕事が自身の粗相の始末であったことは、語るまでもないだろう。

「飲尿フェチの姉とか、なかなか愉快で頭抱えたくなるよ。まあなんでもいいんだけどね、おしっこ臭いまま人前に出なけりや」——姉と従者のプレイについて、『悪魔の妹』フランドール・スカーレット

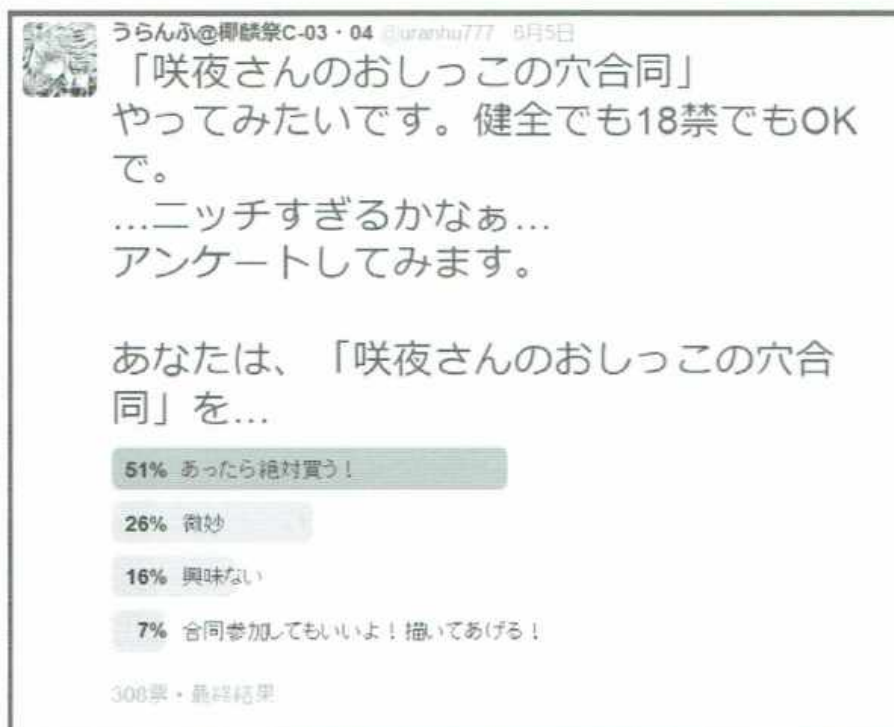
## おしっこの穴コラム④ ～おしっこの穴アンケート～

私は、咲夜さんが大好きです。

「咲夜さんに踏まれて、捌かれて、紅魔館の食卓に並べられたい！」と思うくらい、咲夜さんが好きです。

そして、ある日突然、「咲夜さんのおしっこの穴の物語を描きたい！」と思いました。思っただけでなく、「いろんな咲夜さんのおしっこの穴の話を見たい！」とも思いました。完全で瀟洒な尿者の恥ずかしい穴、みたいじゃないですか！

突然沸き上がった衝動に我慢できず、ツイッターでアンケートとってみました。その結果が、こちらです。



「咲夜さんのおしっこの穴を見たいのは、私だけじゃないんだ！」  
そう勇気づけられたので、作り上げた合同誌がこちらです♪  
有難うございます！



# あとがき

麻生シン

素敵な本にお誘い頂きありがとうございました。  
咲夜さんのおしっこ(の穴)大好物です！  
咲夜さん可愛い。

この度、うらんふさんの同人誌に参加させて頂きましたジャジャラです。  
咲夜さんのおしっこ(の穴)というワードで、  
即思いついたおしっこ茶を描いてみました。  
皆様も紅魔館を訪れた際には、是非メイド長に頼んでみて下さい。  
もれなくナイフのプレゼントがあります。

ジャジャラ

Qちゃんさん

初めまして、Qちゃんさんです。  
初の同人活動で右も左も分かりませんが宜しくお願いいたします(´ω`)  
皆様の求めている様な作品になっていれば幸いです(^\_ \_)  
これからも少しづつ活動する予定なので、宜しくお願いいたします(´ω`)

霧雨霊夢です。  
初めての合同で、初めてのデジタルイラストで難しかったですが、  
楽しく出来てよかったです。  
うらんふさんと知り合って本当によかったと思います。  
あっ、ちなみにゆっくり動画も一応しているのでよかったら是非見てください。

霧雨霊夢

ゆずは

初めましてのかたもこんにちは！ゆずはと申します。うらんふさんとの  
コラボ企画はこれで三作目となりました！今回の咲夜さん合同にも参加でき、  
とても嬉しく、そして楽しんで描かせて頂きました！  
お嬢様という文字を書きすぎて、特に嬢がゲシュタルト崩壊しました。  
次の機会にも是非参加したいです！

今回はたいへんマニアックな合同に参加できてとても楽しかったです、  
咲夜さんの尿道で待ってますのでまたお誘いください！

ほまれ

たちばななおと

咲夜さんがお漏らしする漫画を描いたたちばなと申します。  
コミケが幻想入りしました。今思えば博麗神社のお花見のトイレの行列でも  
良かったんじゃないかと思っています。次はそれで描きます(´▽`)  
お漏らし最高です。我慢と羞恥と恍惚と絶望がセットでついてきます。  
大変お得です。みなさんも是非

咲夜さんのおしっこ(の穴)合同発行おめでとうございます。  
おしっこ(の穴)いいですね…スカトロはちょっと…って人でも  
ぬるま湯いれて強制排尿+洗浄からの好きな飲物いれて疑似聖水プレイとか  
手を出しやすいのではと考えながら描きました  
誰かチャレンジした報告してくださいね！

片栗野干

和沙紫  
-wasashi-

今回咲夜さんおしっこ(の穴)合同誌をお手に取って下さって  
ありがとうございます。  
初めての製作で見苦しい点もありますが、楽しんで貰えたら嬉しいです！  
Twitterもしてるので気になる方は和沙紫@hauras\_trueで  
覗いて見てくださいね(´ω`)

どうも、猫丸ウナです！  
今回うらんふさんの「咲夜さんのおしっこ(の穴)合同」に参加させて頂きました！  
レミ咲がいちゃいちゃし、咲夜さんがおしっこを漏らしてしまう話を  
描きました。レミ咲はいいゾ！

猫丸ウナ

makotiru

はじめましてMAKOcCHIと申します。  
初めての合同誌でしたが楽しく描けました。  
初参加でしたが次があると信じてまた参加してみたいですね。  
購入された方、その他の皆様ありがとうございました！！  
よろしければ自分の事も応援してくれると嬉しです (twitter→makotiru)

最初に本合同誌のタイトルを聞いた時に「すごいタイトルだ」と思ったのが  
第一印象でした。しかし今まで自分が取り組んだことのないジャンル  
だったので実に新鮮な体験をすることができました。  
今後も色々試行錯誤をしていきたいと思えます。ありがとうございました。

みや社会主義  
共和国連邦

駄菓子屋

おしっこの穴壊して世話したいだけの人生だった…  
※サイン入り尿道拡張バルーンは好評につき無事終了しました！

クラウンピースの名前の略し方はウンピーと略す派です。  
ありがとうございました！

塚竹ささき

ほしゆり

この度はとても素敵(意味深)な合同誌に参加させていただきまして  
ありがとうございます！ R-18もOKということで私の中でも挑戦的な試みでした。  
そのピンクなゾーンへと踏み出し、咲夜さんへの愛を詰め込ませていただきました！  
エロ…楽しいですね…！（目覚め）以上、ほしゆりでした！

おとなしい娘も しりがるな娘も つよがりな娘も こいしてる娘も…

大体同じようで違う 好みはそれぞれあるけれど きらいな人はいないと思う  
お誘い頂きありがとうございました。

くろうす

水山猫

初めて、小説とやらを書いてみたので、  
お見苦しい点がおおいかもしれません。  
とりあえず一言だけ…  
「マミゾウさんファンの方、大変申し訳ありませんでした」

はじめまして、與七(よしち)と申します。素敵な合同誌に参加させて頂き有難う  
御座いました。おしっこの穴いいですね。普段露わにしない秘密の部分って  
気になりませんか？見ないで、触らないで、って言われたら余計知りたくなりますよね？  
瀟洒な咲夜さんの弱点の一つではないでしょうか…？  
Pixiv:288194Twitter:minaseryunoshi1

與七(よしち)

と～だい

初めまして、と～だいです。なんていうか、拙作は歪んでますね(苦笑)  
草案ではおしっこ我慢(実はこっちのが好み)とかもあったんですけどね…  
どうしてこうなったのか 本編の先は敢えて書きませんでした、  
この二人ならいつかきっと…  
余裕があったらアナル開発とかもさせたかった…(小声)

お読み頂きありがとうございます、八雲信宗です。  
おしっこ美味しい！まーた大遅刻ですが、果たしてどうなるのでしょうか。  
咲夜さんとおぜうの出会いのお話として考えてみました。  
悪魔だし変態プレイとかむしろ本懐のはず！  
後にさどり様に想起される案もありますが、今日はここまで。

八雲信宗

■ 後書き ■

はじめましての人は、はじめまして！  
お久しぶりの方は、こんにちは！  
うらんふです！

この度は「咲夜さんのおしっこの穴合同」を手にとって頂きまして、  
本当に有難うございました！

「咲夜さんのおしっこの穴がみたい！」  
という私の我儘にたくさんの方に付き合ってもらいました！  
本当にありがたかったです…っ

素敵な作品ばかりで…っ

もう、死んでもいいくらいですが、ここで死んでしまったらこんなに楽しい同人活動を  
続けることが出来なくなってしまうので、死ねませんっ

参加して下さった素敵な皆様、手に取って下さった素敵なあなた様  
様々な方に支えられて、私は楽しめています。  
有難うございます！！

■ 発行日 ■

2016年10月9日

■ 発行 ■

紅い瞳と蒼い月

<http://shirayuki.saiin.net/~akaihitomi/>

■ 発行者 ■

うらんふ

ayanamiasuka@hotmail.co.jp

twitter @uranhu777

■ 印刷 ■

ねこのしっぽ様

■参加者■

麻生シン

うらんふ

片栗野干

霧雨霊夢

Qちゃんさん

水山猫

くろうす

ジャジャラ

駄菓子屋

たちばななおと

塚竹ささき

と~だい

猫丸ウナ

ほしゆり

ほまれ

makotiru

みや社会主義共和国連邦

八雲信宗

ゆずは

與七(よしち)

和沙紫-wasashi-

